
だから僕は作者を殺す

黒咲彼岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから僕は作者を殺す

【Nコード】

N8013V

【作者名】

黒咲彼岸

【あらすじ】

『私、君の作者なんだけど、どうもこの世界は改変ものがたりされてるみた
いなんだよ』——もし、貴方の住むこの世界がライトノベルの
物語の中だったら……どうしますか？

プロローグ 一悲劇の始まり（前書き）

さあ、お祭り騒ぎの始まりです。

プロローグ 一 悲劇の始まり

人生が物語的に展開すると分かっているならば、人は自分の行動に自信を持てることだろう。

人が一度切りと一般的には言われている人生で最も恐れているのは意味のない死や何も成し遂げられないことだ。

ハッピーエンドでもバッドエンドでもデッドエンドでも、何か価値のある行動を成し遂げると既に分かるのなら、迷いなく進むことができる。

けれど、運命という見えない拘束具と拷問具に縛られ続けて生きていくというのもそれはそれで辛いことで、小説のストーリー染みた人生というのもいいことばかりではない。

殊、ライトノベルのような——日常というには刺激的で、日常というには争いの多い、日常というには不安定な人生が待ちかまえているとしたら、それは悲劇に違いない。

読者を楽しませるために、巻を追う毎に悲劇が演出され、結末においてほとんどの場合大団円が用意されているとはいえ、あまりにも多くの苦難に満ちている。

実るか分からない努力を続けるのも苦しいものがあるけれど、努力が必ず実ると分かっている代わりに、必ずそれを使わざるを得ない機会があるとも決定された生き方も苦しいものだ。
アクション

それでもまあ、最後の最後に全てが報われるというのなら、そんな人生もいいかもしれない。

だけれど、一つだけ——どんな物語にせよ、その展開は全て作者次第ということだけは、忘れてはいけない。

ハッピーエンドもハッピーエンド、皆が皆して笑顔で終われるようなストーリーを書いてくれる作者ならいいが、性根の腐った作者なんかに当たったりしたらもうホントに最悪だ。

難易度の高い試練ばかりが待ち構えている割に、最後に用意され

ている結末は払った代償の方が大きかったり、仲間が数人欠けているような中途半端な救いだったり。最悪バッドエンド直行で、苦しんだ挙げ句主人公死亡とかヒロイン死亡とか……そんな展開すらが有り得るのだ。

そう、主人公にとって最大の悲劇は作者がロクでもない人間であることに違いなく、その点この物語の主人公——つまり僕だが——は間違いなく不幸と言えるだろう……。

高校初めての春、つまりは新入生として青春真っ盛りの学生生活を送り始めて2度目の土曜日。一人暮らしの借り部屋でだらけていた僕の耳に、誰かの訪問を告げるインターフォン。

郵便だろうとドアを開けた先には、茶髪セミロングを姫カットにしたつり目がちの美少女が立っていて、「何でしようか？」という僕の裏返り気味の問いに彼女はニコニコしながら口早にこう答えた。「私、君の作者なんだけど、どうもこの世界は改変ものがたりされてるみたいなんだよ。本来なら君は爆弾殺人をきっかけに超能力に目覚めて物語が始まるはずなんだ。でも、何故だかその前にヒロインが死んじゃってお話にならなくなっただけ。だからまあ、覚醒にはちょっと早いんだけど、そこら辺で車にでも轢かれてちゃっちゃと臨死体験してくれないかな？」

ほら、うちの作者は性根が腐っている。

腐っている上に、物語のプロローグすらがおざなりだった。

第一話 一主人公の悲劇（前書き）

ワナビの情熱が明後日の方向へ飛んでった。

第一話 一主人公の悲劇

間取りが1Rの我が住居は玄関から水周り、浴室の扉と部屋の全
てが見渡せる範囲にある。

ベランダはなく、部屋も狭いため、最も空間を取るベッドを椅子
と兼用していて、ほとんどの場合僕は寝具に腰掛けながら正面のテ
レビを見るなりして過ごしているのだが、そういう理由もあって、
机と言えば折り畳み式の小さなものが一つだけしかない。

まあ、つまり何が言いたいのかというと、要は訪客など想定した
部屋作りはされていないのだ。

男友達の一人や二人が入ってくることはあっても、慣れ合った関
係だし、自分はベッドに寝そべり、一人は腰掛け、もう一人は床に
座り……とそんな風に位置取ることが常であって、対面して座る機
会は今までなく、急遽折りたたみ椅子を中央にお互い座れるだけの
スペースを開けたのだが、居心地が悪いことこの上なかった。

例えその相手が玄関で電波発言をまくし立てた自称作者の痛い少
女だとしてもそれは変わらない。

てつきり無遠慮に上がり込まれる流れかとよく漫画なんかである
展開かと想像したのだが、一応常識らしきものをかろうじて持ち合
わせていたらしい彼女は「とりあえず中に入れてよ」と至極まとも
に要求し、その前の酷い台詞とのギャップに判断力が鈍っていた僕
はついつい招き入れてしまったのである。

勝手に入られたならともかく、自分が許可してしまった以上はそ
れなりにもてなさないといけない。そういう気持ちがあるからこそ、
狭すぎる座席スペースと散らかった部屋、そして安い緑茶という劣
悪な環境が気まずい。

だが、もてなされた当の本人は気にした風もなく粗茶を啜り、お
茶受けに用意した100円の揚げ菓子を頬張っていた。

安上がりなおもてなしで満足してくれるのは有り難いが、このま

までは自分から自己紹介してくれそうにない。早いところこのアンノーンな生き物の正体を明確にしたいのだけど、こちらから切り出さなければならぬらしい。

「あの、それでさっき言ってたこと、なんだけど……」

「うん」

「あなたが……えーと、作者？　で僕が主人公？　なんて、正直ちよっと信じられないんですが……」

「あははっ、まあ、だろうね。でも……なんだ、もっと直接的に貶されると思ってたのに。『イかれた妄想電波ちゃん』とか」

「いえ、まあ」僕は首を振った。「そういうのは心の中だけにしますから」

途端、机の下で足のすねを蹴られ、それが思いの外痛い所に入っただために、鈍痛に耐えかねた僕は右膝を抱えて床を転がる羽目になった。

いやだって、普通そう思うだろ！「私作者です」って自称神様の亜種にしか思えないじゃん！

「~~~~っ、自分で言ったくせに……」

「他人に言われるのは腹が立つものでしょ、そういうのは」

僕の恨みがましい視線は澄まし顔にはねのけられ、急須の残りもなくなったらしく、彼女は立ち上がって自分でお茶を入れ直し始めた。

「……僕は君の創ったキャラクターなんだろう？　なら自分で言ったのと同じじゃないか」

その思わず出た台詞に電気ケトルのスイッチを入れようとしていた手を止めて、自称作者様はこっちに振り向いた。せっかくの顔を台無しにする無表情に僅かながら驚きが見える。

しまったな、さっきの台詞だと彼女の台詞を信じたようにも取れしてしまう。

「いや、ただの言葉のあやだからな。君の言ったことを信じたわけじゃない」

「まあ、それでもとりつく島のないよりはいいよ」言って、新たに用意された二人分のお茶の片方を差し出してくる。「さて、そうだな、まずはとにかく私が作者だと……この世界が創作物の中だということを分かってもらわないといけないのかな？　うーん正直面倒くさいから省いちゃいたいぐらいなんだけど、妥協して信じてくれない？」

「無理」

そう即答してやると、舌打ちが返ってきた。

「仕方ないなあ。えーと、じゃあ君さ、自分の名前って分かる？」
「え？」

「だから、自分の名前。それから家族の名前、生まれた場所、誕生日、血液型。どれでもいいけど1つでも覚えてる？」

言われるがままに考えてみて、そして背筋が凍るような寒気が身体を襲ってきた。

ない。言われたものの何一つも頭に浮かんでこない。

まるで、初めからそんなものはないように。

それでも信じられずに何かを発しようとした口は何も言い出せずに開いたり閉じたりを繰り返すだけで、最後にはキツく唇を結んでしまった。

記憶喪失になった——そう、考えられればどんなに楽か。

だが、そうではないというのは感覚的に分かってしまう。思い出そうと思えば十五年間自分が過ごしてきた記憶は何の支障なく思い出せるのだ。

むしろ問題はその過去のどれを振り返っても自分の名前が呼ばれている場面が存在しないことである。中学校新学期の自己紹介の記憶においてすら自分がどう名乗ったのか曖昧で、だというのに今まで支障なく生きてこれたという無視するには大きすぎる矛盾が立ちはだかっていた。

自分の名前が分からないのに気づかずに生活できるわけがない。なのに、今僕はこうして高校生になって一人暮らしをしている。両

親は幼い頃になくなって、年の離れた姉が……いや待て、両親の名前は何だっけ？ 姉の顔は？ 歳は幾つで何で稼いで僕を養ってくれた？ そのどれ一つとして分からない。

そんな様子を見て、「分からないでしょ？」という彼女の言葉に素直に頷くしかなかった。

「自身の名前も知らないでこれまで支障なく生きてきた、過ごしてこれたというのが、この世界が創り物だという証拠にならないかな？」

「現実ならそんなことはあり得ない。この歪みはここが物語の中だから……ってことですか」

「そう。君という存在は十五年生きてきた人生で培われた物ではなく、物語開始時点から過去に遡ってプロフィールを設定されて生まれた。だから、名前がなくても『高校一年生という設定』でここにいる」

歳月で培われた人格ではない——そうさりと云える彼女にも、今までの記憶や体験全てを創り物と言われたことにもぞっと身の毛がよだった。

けれど、逆にその心の震えが彼女の言っていることが真実を突いているのだと訴えかけてくるために、心中で否定するのすらうまくいかない。

言われるまでそんな歪みにも気づけなかった僕に、反証を提示できるわけがなかった。

「どう？ 信じる気になった？」

「はい」僕はそう答えるしかなく、そしてだからこそ尋ねた。「僕が、どうやら物語の」正直口にするのも恥ずかしいけれど、「その、登場人物だということは、感覚で。ただ、一つ訊きたいんですが……」

「何？」

「僕、主人公なんですよね？ なのに名前がないってどういうことですか」

「ああ、それはこの世界がライトノベル用の小説だからだよ」

「ライトノベル？　って、アレですよ、若年齢層向けの挿し絵付き小説」

「そう。ジャンルの多くは学園モノ・SF・ファンタジー、魔法から超能力まで刺激に溢れた要素を加えて、バトルに青春を繰り広げる、読みやすさが売りの物語」

「それと僕が名無しなのと何の関係が？」

分からずに訊く僕に彼女はポリポリと頬を搔いて、それから爆弾を落としなされた。

「いやさ、ラノベって大抵美少女が出てくることから分かるけど重要なのはヒロインじゃん？　主人公とか割とどうでも……」

「ちょっ！　本人の前でなんてことを！？　　というか待って、主人公だって重要だろ！？」

「だって主人公って特徴ありすぎると読者が自分と重ねにくくなるし」

「だからって名前ぐらい決めてくれても！」

「えーめんどい。ほら、たまに居るでしょ、あだ名や一人称だけで名前が出てこない主人公。あれでいこうよ」

「いやいやいや！　あれは1つの技法であって……！　あだ名を付けるにも名前はあるし！」

「あだ名だけ決めれば必要ないでしょ。えーと、そうだなじゃあ『ちいちゃん』で」

「ちいちゃん！？　どっからきたんだよそれ！」

「飼ってるセキセイインコの名前。『ちいちい』鳴くから」

「安直すぎるだろ！？　もうちょっとひねってやれよ！」

「いいじゃん、可愛いじゃん！　ちなみに2匹いて一号二号と順番になっ……」

駄目だ、この分だと3匹目はV3になる流れだ。

「ひでえ！　ひどすぎる……！　あんためんどいとか言って、単にネーミングセンスがないだけだろ！？」

「作者になんてこと言うんだちいちゃん」

「ちいちゃん言うな！　ちゃんとした名前を付けろ！」

「人に頼む態度じゃないなあ」

「付けてください！」

即、言い直した僕の必死な態度に、「えー、仕方ないなあ」と渋々といった風に頬を膨らませながらも了承はしてくれたいらしい。彼女は唯一の持ち物だったボストンバックをまさぐって、『日本苗字辞典』と『赤ちゃん名付け図鑑』を取り出すと、まずは苗字辞典の方をロクに見ずペラペラめくって適当に指を指した。

「よし、君の苗字はこれから小林な」

「『小林な』じゃねえええ！」

僕の叫びを無視して今度は赤ちゃん図鑑の方を手にとって、タ行を開き「ち、ち、ち」と呟く彼女。どうやらあだ名を『ちいちゃん』にすることは諦めていないようだ。

「親ちかひら衡がいいかな。オーケー、小林親衡に決定！」

「酷い投げやりだ……」

「あのねえ、わざわざ付けてあげたんだから文句言うなよ。特別に意味を持たせようと思わない限り、ヒロインならともかく男主人公の名前なんて、大抵こんな感じで決めるもんだって」

全く悪びれず、僕が精神的に負ったダメージも気にせずそう言い、辞典2冊をしまった彼女が入れ替わりに取り出したのは小さめの大学ノートだった。

「……それは？」

「小説のプロットと設定帳。主人公の名前決まったし、書いとかないといけないから」

広げられたノートにはかなり汚い字で色々と書かれていた。ページによっては全面に黒いインクが踊っている所もあったが、最終的に彼女の開いた『登場人物』と上に表記された見開きの左側、『主人公』のプロフィール欄には『男』『高一』『親なし・姉仕送り』と書かれているだけのほとんど白紙の状態で、今まで彼女が作者と

して言った諸々が本音であることがまざまざと感じられた。さつきから同じ言葉ばかり繰り返しているが、これは酷すぎる。

そこにやはり汚い字面で『小林親衡』『ちいちゃん』と付け加えられた途端、―――自分の中で変化が起きた。

さつきまで思いでの中にあつた『名前のかけた記憶』が『小林親衡と呼ばれて過ぎてきた記憶』に書き変わっているのだ。

まるで今まで僕が小林親衡という人間として生きてきたかのように書き換えられている。

本日三回目の悪寒。

これが……設定が加えられるということらしい。

だとすれば、彼女が作者というのも確か、なのだろう。

この世界や自分が創り物めいているという点は納得したとして、彼女がその創り手である作者という話は正直眉唾もいところだったのだが、そうも言ってられないようだ。

「……あなたが作者だってことは分かりたくもなかったんですが、分かりました」

しかしそうなると、どうして作者がわざわざ主人公を尋ねたのか、それが問題だ。

「それで、その作者様が何の用で？」

「最初に言ったじゃん。この世界は改変されてるって。それを元に戻すためだよ」

「ああそういえば、超能力がどうか……」

精神的ショックが大きすぎてすっかり忘れてた。

「この世界は『超能力バトルアクション』モノでね。当然主人公である君は能力に目覚めて戦いに巻き込まれるわけなんだけど、それがどういうわけか起こらないんだ」

「起こらない？」

「正確には覚醒するためのイベントが発して、さらにはヒロインが出会う前に殺される」

「はあ……？　でも、作者なんだろう？　だったら書き直せばいいん

じゃないの？」

「何度原稿を書き直してもいつの間にかまた書き変わってるんだよ。で、気づいた。内部に何か異物が混じり込んでる。それも私が小説に描写していないところで物語に介入しているらしい。小説は世界の一場面を切り抜く窓。その時起こっていること全てが書き出されているわけではないから、外側から原因を探ろうとしても限度がある」

「だから小説の中に乗り込んできた？」

「そう。わざわざ女の格好までしてね」

「へえ、わざわざ女の……ってあんた男なのかよ！」

思わず立ち上がって叫んでしまった僕を見上げながら彼女改め彼は……いや、めんどいから彼女で統一しよう、彼女は湯呑みに口につけ何でもない風に言った。

「常に君の近くにいる必要があったから仕方なくね。準ヒロインキヤラの外見を利用して乗り込んだんだよ」

「だからって……それなら別にルームシェアしてる友人とか、他にもあったでしょうよ」

「まあ、それでも良かったんだけど、女役の方がメリットがあったから」

「メリット？」

「物語が駄目になりそうな時は、最悪私がイチャつけばラブコメってことで誤魔化せ——」

「ねえよ！　というか何でそこで身体張ろうと思った!？」

真顔が怖いわ！

「あのね、この物語は公募用の作品なんだよ。新人賞に応募するために練られた小説なの。せっかく細かく設定を考えて、粗筋も何度も見直して、ヒロインの魅せ場を作ったり、君の見せ場を作ったり……」

そういう割には僕の名前すら決めてなかったろうに。

「小説家のなりたがりとして全力をもって挑んでるの。だから賞取

るためなら多少の犠牲ぐらい……ね？」

そう言う我が作者様の笑顔はひじょーに素敵こわかだった。

しかし創り手がどう思っているようにこっちにも感情というモノがある。

「正直あんたとイチヤつくのは天変地異が起ころうと御免だ」

言った瞬間、立ち上がった彼女に局部を蹴り上げられた。

「うぐおお……」

前のりに倒れ、痛みに耐えかねて床を転がっていると仰向けになった一瞬の間に何か見えてはいけない物が見てた気がした。もう一度視線を床から天井にひっくり返すと、立ち上がった彼女のプリーツスカートの中が見えている。

ラノベの準ヒロイン役と言いつつも、ごく常識的な丈のスカートは普通にしていれば中身をしっかり守ってくれるはずだったのだが……紅白の縞パンが丸見えだった。

「パンツ見えてるぞ」

「いいんだよ、サービスシーンだから」

「いや、蹴られたからあまりサービスになってない気が……」

僕の抗議は当然の如く無視した奴は、明後日の方向に視線を向け何故かいきなり語りだした。

「私さ、いつも思うんだけどいくら性に興味がいく年齢層向けとはいえ、ラノベのヒロインは露出が多すぎるよ。大切な身体なんだからもう少し貞操を持つべきだね。年頃の娘なんだし。例えばハーレム物だと特に顕著だけどヒロインズのアプローチは過激すぎる。まあ読者へのサービスカットだから仕方ないだろうとは思うよ？、けどそういうったお色気や告白イベントが求められるのとは裏腹にハーレム状態は維持しないといけないわけで、だから主人公が鈍感キヤラになっちゃう」

「あーまあ、それは分かるけど、それと縞パンと何の関係が？」

「いつまで見てんだエロ助。……でも、いくら鈍感といっても限度があるでしょ。主人公の鈍感さにしろ、ヒロインのお色気にしろ、

いきすぎると小説のリァリティーを失わせる原因になる。ハーレム物読んで思ったことない？ この鈍感主人公、絶対日常に支障きたすレベルだろうって」

なるほど、分からなくもない。『付き合ってください』というヒロインの台詞を買い物の荷物持ちなどと勘違いする程度ならまだ現実的になくもないが、性を自覚しだす頃合いのヒロイン達の過激なアピールに対して鈍感なのは確かに違和感を得ることはある。

「そういう小説特有の歪み——ご都合主義ってやつが私はあんまり好きじゃなくてね。ヒロインが簡単に惚れたり、ツンケンしてた態度をいきなり変えたり、胸当てたりキスしたり大衆の前で告白したり入浴中に乱入してきたりいつの間にか横で寝てたり『○○君なら……いいよ?』とか言ったり、だいたい中が見えるような短いスカートだし、というか見えてる太股の具合からいつて穿いてるのも思えないし、ああいう行動するってどう考えても痴じ——」

「うわああああ！ 何てこと抜かすんだあんた！」
ラノベで一番言っちゃいけないこと言ったぞ今！

「だからより自然にサービスシーンを作るべく頭を捻った結果、主人公の視点を下げさせればいいという結論に至ったというわけ」

「局部蹴りのどこが自然だ！」

「ただこれにはデメリットもある」

こいつ、人の話を聞く気ねえ……。

「ヒロインが暴力的な嫌な奴になるんだろ」

「いや、主人公にDM設定がつく」

「あんた男主人公に恨みでもあんのか！？ さっきから主人公の扱いがあまりにも雑だぞ!？」

「ヒロインはラノベの華なんだよ？ 汚れ役をさせるわけにはいかないだろ」

言外に主人公は汚れ役って言いやがった。

……おかしいなこいつ本当に作者か？ 美少女の皮被った悪魔にしか見えないんだけど。

「ヒロインは皆の憧れなの、幻滅させるようなことはしちゃいけないの」

「だったらまずあんたがその身体から出てけ下郎！」

「うわ酷っ」

大げさにショックを受けたフリをする彼女だが今更白々しすぎる。

「どう考えても酷いのはあんだだろうが！」

そう叫んだ後、さっきからの突っ込みで喉に負荷がかかっていたらしく咳込んでしまった。客に出されたお茶を一気に飲み干して、喉の具合を整える。

突撃訪問型のヒロインなんてロクなものじゃないと前々から思っていたが、全くもってその通りだった。

だが、そんなこちらの心情を作者のくせして汲もうとしないのがこの悪魔だ。まだ会って間もないがそれは痛いほど分かった。

「まあ、こういうラノベ特有の楽しい掛け合いはひとまず置いておこう」

「僕は全然おもしろくなかったけどな」

無然と言い返す僕に一瞥もくれずに、彼女はまたもや空にしたらしい急須にお茶を入れ始めた。この10分間ほどに何杯飲むつもりだ。どうやら常に何か飲んでいないと落ち着かないらしい。

「とにかく話を戻すけど、ヒロイン死亡という改変されたこの物語を何とかするために私はこうして物語開始前のこの世界にやってきたわけだ。目下の目的はヒロイン周辺の監視と君の覚醒」

「ああ、そうだ。それで、僕の能力って何なの？」

この作者と逆贔屓されてる自分の立場には辟易しているが、その点にだけは興味がある。誰だってそうだろう？ 自分に特別な能力が宿ってますって言われたら詳細を聞きたくなるものだ。

だというのに、そんな僕に嫌らしい笑顔を向けて奴は言った。

「それは死んでからのお楽しみ。あ、でもヒントぐらいはあげよう。

今回の超能力は生物をモチーフにしてるんだけど、君の能力は【サンショウウオ鯢】が元ネタ」

「サンショ……ウオ？ え、ヒントそれだけ？」

「教えすぎるとつまらないでしょうが。ちなみに私——この準ヒロインの能力は【落ち葉】」

何だそれ。【サンショウウオ鯨】でも意味不明なのに【落ち葉】とかまるで想像つかん。

「で、そっちの能力の内容は？」

「秘密」

だろうと思ったよ。何にせよ僕の名前よりも能力の名前の方が頭をひねって考えられただろうことだけは間違いあるまい。

「ま、能力を手に入れたら教えて上げるよ。あつ、それから問題2つ目の方の……」言いながらバッグを漁って、目的だったらしい写真差し出してきた。「ヒロインはこの子」

受け取って見てみると、黒い長髪を腰辺りで2つに縛っている肌の白い少女が写っていた。なるほど、確かに美人だ。年齢は同じぐらい。身長も女子としては高めですらりとしたスタイルをしている。「これも」

次に出してきた一枚は顔のアップで、整った顔立ちがさらによく分かった。

「どう？ どう？ 可愛いでしょ」

「まあ、可愛いけど……」

と肯定してしまったのがまずかった。

「そう、それに顔だけじゃなく性格もいい子なんだよ。名前は阪本さかもと実歩みほっていうの」

……気をよくしたらしい作者による娘自慢が始まってしまった。

「気立て良し器量良し、一途に想ってくれる、胸は少々控えめだけど美脚の女の子！ 超良物件です！」

いや、うん、確かに可愛いし創り親が言うんだから性格の方もそうなんだろう。ただ一つ言わせてもらいたい。僕もあんたの息子なわけなんだけど、何なのこの差。男か、男だからか！？

「ほらほらあ、会いたくなっただでしょ？ だからさ、ヒロインが死

んじやう前に早く死んじやってくれない？」

同じ創り手からここまでの格差を与えられているとは露知らずに微笑んでいるヒロインの写真から顔を上げ、恐ろしいことを軽く言ってくれる準ヒロインの皮を被った作者に視線を写す。

満面な笑顔で持って、握手を求めるように手を伸ばしてきたその我が平穩の破壊者は言った。

「さあ、超能力バトルと非日常に満ちたラノベな人生へレッツゴー」
「はははははははっ！」

そんな誘いに思わず笑いが漏れる。

ちよっと前までは疑いもしなかった自分の存在。それが作者の創ったキャラクターだという。名無しであったこと、家族の詳細も思い浮かばないこと、多くの歪みを抱えながらも、気づかずにすごしてきた『ことになっている』人生。それがどれほど薄っぺらいものとは言え、平穩無事な生活の有り難みは皮肉にもこの異端子のお陰で身に染みて理解させてもらった。

超能力？ バトル？ 非日常？

なるほど、それを読みたくて、少しでも体験したくて読者はラノベを開くのかもしれないが、そんなもの現実にこの身に起きたら面倒なことこの上ない。その物語を紡ぐ作者がコレでは尚のことだ。

だから、僕は彼女と同じく自分のできる最高笑顔で返してやった。
「断固拒否する！」

第一話 一主人公の悲劇（後書き）

作「僕と契約して主人公になってよ」
主「だが断る！」

第二話 一使い回しキャラの悲劇・前（前書き）

さあ、墓穴は掘り終わった。後は作者を埋めるだけだ。

あ、先に言っとく。作者は動く的だかな。

第二話 一使い回しキャラの悲劇・前

「……行ってきます」

「行ってらっさい」

身だしなみを整え、まだくたびれるほどには使っていないぱりつとした制服に腕を通し、靴を履く。学校指定鞆の中をチェックして忘れ物がないのを確認した後、片肩が悪くなるんじゃないかと思うほど重い学習用具を肩にかけて立ち上がった。

下を向いた際に目に入った狭い玄関には靴が二つある。一つは僕の物。もう一つは作者を自称する見た目少女——掛郡詩穂かかりぐん しほというらしい。本人が「この身体の名前はそれだから」と言っていた——の物だ。

そう、「断る」と言っただけでハイそうですかと引き下がってくれるはずもなく、僕の日常を破壊しにやってきた侵略者はある日以来アパートに居座っていた。ある意味ラノベ的展開ではあるのだけど、居候の身でありながら家事もせずここ数日だらだら過ごすことにせいで出している彼女に、女性らしい魅力を感じることは皆無と言っている。

サービスシーンとほざき、他人ヒトのベッドに潜り込み、三秒後には僕を蹴落として安眠スペースを奪うような人物相手に色めいたことなどあるわけがないだろう？

資金と称して作者特権で創り出したという莫大な現金がなければ追い出している。まあ、金に関しては確かに有り難かったが、これも狭い部屋での二人暮らしの息苦しさで相殺されてしまっている。姉に感づかれて巻き込んでしまうのは避けるために部屋を変えるわけにもいかないのが辛いところだ。あの尼……いや、野郎が「姉ルートでラブコメするなら、今から『血は繋がってない』ことにしてあげるけど」とプロット帳を広げなければ、さっさとこんな部屋は出ているんだけどなあ。

この数日の間に奴について分かったことは、中毒とっていいほど飲み物を飲むこと、その飲み物は味がついていれば何番煎じのティーバッグでもいいこと、それから朝に弱いことぐらいだった。

今も僕の挨拶に下半身だけベッドから持ち上げて生返事を返し、寝ぼけ眼で頭を掻いている。いつもならその後ボタンと死んだようにベッドに沈むのだけど、今日は何故か立ち上がって玄関にまでやってきた。

「ねえ、そろそろ意地張らないで主人公役こなしてくれないかな？」

「絶対嫌だ」

とりつく島のない僕の即答に彼女は頬を掻いて渋い顔をして唸る。

「じゃあさ、せめてヒロインと顔合わせぐらいしてよ。相性はいいんだし、それぐらいなら損だってないだろう？」

「そもそも接点がないんだから無理だって」

「いや、同じ学校に通ってるしさ……」

「え？ そうなの」

「言ったじゃん。というか、生徒会の副委員長だよ？ 写真見て気づかなかったの？ 今の所接点がなろうと、話は絶対合うはずだから、喋りかければ何とかなるよ。………ああ、そうだ！」

彼女はそこで悪巧みを思いついた悪ガキそのものの、口角を吊り上げた嫌な感じの笑みを浮かべた。「君に良いものを貸してあげよう」

「いやいらない」

悪い予感しかないし。

「そう言うなよ。貸すっていつてもただの眼なんだから」

「眼？」

「そ、作者の視点ってやつを体験させてあげる。お試し期間だよ、お試し期間。そう邪険にしないでとりあえず試してみるぐらいはいいでしょ？」

「作者の視点ねえ……」

常識的に考えてキナ臭さすぎる。そんな提案をこの悪魔が意味なくするとは思えない。お試し期間とか言って後で何かしらの代償を

求められるはずだ。

当然の如く断ろうとした僕が口を開く前に、彼女は右手人差し指を向けて、その指の腹で眉間に触れた。

「ま、新しい世界観ってのを楽しんできなよ」

「お、おい！ おまつ、勝手に！？」

「気にしない気にしない。ほら、そろそろ出ないと学校遅れるよ？」

抗議の声をいつもの様にあしらわれ、背中を押された僕は追い出される形でアパートを出ることになった。

「あんにゃろ……」と呟いて恨めしげにドアを振り返るが、無情にも鍵とチェーンまでかけられる音がした。

溜め息。吐く度に幸せが逃げるといいうけれど、僕の幸せは目下家出中で作者が出て行かない限り戻ってきそうにない。

既に眼とやらは無理やり押し付けられたみたいだが、今のところ何の変化もない。

しかしこの眼、本当に後でふざけた対価を請求されてたりしないよな？ クーリングオフは……効かない気がする。

だが、そんなことを気にするのには遅すぎたらしい。こんな眼を押しつけられたことを後悔する機会は思っていたよりも遥かに早くやってきた。

1

作者を名乗る中身男の美少女との遭遇は衝撃的ではあった。むろん電波な女の子の突撃訪問だったからというのもあるけれど、彼女が言ったことはある程度筋は通っていたし、得体もしれない矛盾が自分の存在にあると気づかされたことによって受けた驚きは大きく、——だからこそ、それを言い当てた彼女の主張を無下に扱うことがどうしてもできなかった。

だけど、心の奥底で……彼女が言ったのとは別の真理というやつがあって、彼女の言葉はやはり間違っているという可能性を捨てき

れずにいたのだろう。

今僕の身を襲う三度目の衝撃は最初のものよりすさまじく、そして決定的に『掛郡詩穂Ⅱ作者』という式を成り立たせてしまった。

いつもの通学路、バス通学の僕がいつも並ぶバスターミナルの列。視界を藍色に彩る同じ制服の生徒達。

……彼らの顔がなかった。

のっぺらぼう。その表現がぴったりの起伏すらない、まるで肌色の仮面を被ったような表情の見えない顔。

それが見渡す限りのどの人々の顔にも張り付いている。

なんだコレ。

最初はそう思った。そして次にこれが『作者の視点』というモノだという悪質商法犯罪者の台詞を思い出し、考えてすぐに答えを得ることになった。

コレは……この人達は脇役なのだ。

だから顔がない。

作者にとってのカボチャや大根。

テンプレートな性格を内蔵した動く背景でしかなく、物語に何の影響も及ぼさない存在。

顔や服装なんてキャラを際立たせる要素は考えられてない。

何がお試し期間だ。ネットでソフトの30日間お試し版をダウンロードしたらウイルスでしたとか、そういうレベルの悪質さだぞこれは。

正直、今すぐUターンしてこの忌々しい眼を取り除いてもらいたかったが、学校に遅れるだけで性格の悪いアレが素直に応じてくれるとは思えない。仕方なくバスに乗り込んだ僕は、できる限り周りを見ないようにして登校せざるを得なかった。

世界が色褪せて見える、というのはこういうことなのだろう。

それが午前中の授業をこの眼と共に過ごしての僕の感想だった。

昨日と同じく、この学校になってからつるみ出した級友と昼食を取っている今現在にしたってそれは変わらない。

お互いの暇つぶしになるような話題で取り留めもない世間話に花を咲かせながら、学校生活の醍醐味とも言える同年代との交流というものを楽しんでいるはずなのに、どこか一步距離を置いている自分がいるのだ。

まるでこの会話さえが、主人公の日常を演出するために用意されたシーンであり、声までもが誘拐犯の脅迫メッセージのように機械質に変声して聞こえてきそうな具合で、昨日まで普通に接していた彼が『主人公の級友』としてのテンプレートな受け答えをインプットされた人形の様に思えてしまう。

妙に若い担任女教師も、委員長である澆刺とした女子も、学校という装置の一つなのだとこの眼は語りかけてくる。

のっぺらぼうの友に目を合わせるのを避けながらつついた弁当もまた味気ない。

息苦しさを感じ、どこか人のいない場所へと逃げ込みたい気分になんて苛まれていた、その時だった。

灰色の視界の端を、色のついた存在が掠めていった。

思わず振り向くと、教室の開けられた窓から、廊下を横切っている見たことのある顔の女子生徒の姿が見える。

……ヒロインだ。

はっ、確かに美人だわ。実物を見るとさらにそれが分かる。

あれがこの物語の登場人物か。さすがは脇役と一線を画した存在、オーラまで見える。いや、この目で見ているからこそなんだろうな。今までのっぺらぼうばかり目に入っていただけに、顔のあるキャラクターがどうしても魅力的に思えてしまう。

作者め、これが狙いだったな。

どうしても僕とヒロインを会わせたいらしい。

この分だと接触するまでこの気持ちの悪い視界を元に戻してはく

れまい。ホント疫病神だなアイツは。

うーん、そうとなればせめて会話ぐらい交わしておいた方がいいのかもしれない。作者の思惑通り動くのも腹が立つが、こんな眼と生活を共にするのはもっと御免だ。何としても早く取り除いてもらいたい。

けれど、さて一体どうやってあの目の覚めるような美少女と接触すればいいというのか……。

しかしその放課後、そんな思い悩みは杞憂に終わることとなった。SHRが終わり、クラスメート達もほとんどいなくなった教室で、何か接点を作る方法はないのか、作者の言うように話しかければうまくいくものなのか、結局案も思いつかず踏ん切りもつかず、とりあえず帰って元凶にアドバイスを貰おうと下校準備を進めていた僕に、向こうから声をかけてきたのだ。

「もう！ 遅いと思って来てみれば……、今日は委員会の日でしょう？ あなたも生徒会の一員なら自覚を持ってすね……」

悩ましげに、そして面識のないはずの僕に、そう言った彼女は手を取り強引に僕を引っ張り始めた。

ひんやりと冷たく、柔らかい感触に僕の方は戸惑いを隠せない。

何だ？ 何が起こってる？

委員会？ 生徒会の一員？

そんなもの、まだ一学期が始まって間もない頃に新一年生がなれるものではないだろうし、そもそも僕はなつた覚えがない。

だけど、そこまで考えて1つ思い当たった。

あいつだ……。あいつの仕業だ。例の設定帳だかプロット帳だかの僕の欄に『生徒会の一員』と付け加えたのだろう。それしか考えられない。

あのノート、今度機会があったら絶対燃やしてやる！

そこまで僕とヒロインをくつつけたのかと、心の中でアパートでゴロゴロしているはずの暴君を睨みつけながら僕は生徒会室に連行されていた。

「えー、毎年のように要望が上がる学校指定靴の自由化ですが、これは例年の如く教員側にはねのけられました」

「一応、マニフェストに入ってるんだけど、そんなにあっさり諦めていんですかね……」

「いいんじゃない？ それこそ毎年のことだし、生徒も本気で実現できるとは思ってないわよ。これで議題は全部？」

「あつ、あと保健医の山本先生から連絡。また今週も貧血者が出たので引き続き注意してくださいってさ」

「ああ……、じゃあ『朝の挨拶』の時に呼びかけますか」

「そうね、私らにできることってそれぐらいだし。ふう、じゃあ―――解散」

ポンポンと詰まることなく、形だけといった感じで議論は進み、最後に委員長の解散宣言と共に委員会の皆さんがそれぞれ帰宅準備を整えて部屋を出始める様子を見て、僕は安堵を息を吐いた。

終わったあ……。覚悟を決める前に連れ込まれ、のっぺらの先輩方に囲まれた時は本当にビビった。何せ、まるで覚えのないのだ。メンバーの名前も顔も知らなければ、自分の立ち位置も分からない。話の内容にもついていけない。

縮こまって、目立たないようにするのが精一杯で、指名されようなどともなく終了してくれたのは本当に有り難かった。

もちろんそれは僕が話そうとしなかったからで、正直褒められたことではないけれど、そんな態度をやっぱり見過ごしてはくれない人物が一人いるわけで。

思わず出た深い溜め息に反応して、同じく息を吐いたヒロインである実歩さんが歩み寄ってきて言った。

「はあ……緊張せずにもっと積極的に参加してくれると嬉しいんだけどなあ」

「すいません」

理由はどうであれ責任のある役職の身として、確かにさっきの僕は情けなく映っていたことだろう。原因が原因だけに理不尽な気もするが、脇役と変わりなく自覚がない限り操り人形の彼女には罪はない。

その代わり家に帰ったら奴を蹴飛ばすと心で誓った。

「いや、謝らないで。転校したてで心もとないなんて理由で私が強引に引き込んだじゃったんだし、謝られると申し訳ないわ」

……そういう設定なのか。まずいな、その辺の事情は当事者ながらまるで知らないわけで。下手を打つ前に話を変えた方が良さそうだ。

「そういえば、さっきの貧血ってなんですか？」

「ここ数ヶ月で結構生徒が倒れてるの。十五人くらいになるかな？」

前々から教師も注意してるんだけど減らないみたいね」

「へえ……」それは、おそらく作者の作った物語が関わってるんだろうなと思いつつ、それは胸の内に留めておく。「割と深刻な話ですね」

「そうね。あなたも気をつけて。それじゃ、また明日！」

そう微笑みかけてくる彼女は、本当に可愛らしかった。

ああ認めよう、あんたの作ったヒロインは確かに魅力的だよ。身に覚えのない好意を向けられているような官職は薄ら寒いが。

彼女が部屋を出ていってから、色々思うことがあって金縛りの様にフリーズしてしまった僕は、しばらくしてやっと再起動し、のそのそした動きで机の上に置かれた鍵を取った。部屋の施錠と鍵の返却は最後に残った者の義務のようだ。

生徒会室を出て鍵を閉めて振り向くと、廊下の向こうから女子生徒が二人やってくるのが見えた。それも顔のある女の子だ。

登場人物。それも顔がいいとなれば、その役も絞られる。準ヒロインの可能性が高い。

思わず身構えてしまう僕に、こちらの視線に気づいたらしき黒髪ショートの子が手を挙げた。

「よう、少年」どちらかと言えば可憐というより愛らしいという外見に似合わず彼女はそんな口調で言った。「生徒会はどうだった？」

「はあ……何か生徒会に用でも？」

「ん。教師から頼まれてね。最近物騒な事件が起きてるから、生徒会活動も自粛するようにだど。ほらこれ」

そう言っ歩いてきた彼女に渡されたプリントには、確かに『朝の挨拶』と放課後五時以降の活動自粛を促す文が綴られていた。

「物騒なこと、ですか？」

「知らないの？」今度は二人組のもう一方、金髪の死んだ目美少女が口を開く。「この辺で起きてる連続殺人事件のことよ」

「え？」

「女の子ばかり三人も。だから、副委員長さん、送った方がいいんじゃない？」

金髪さんの指さす先には窓越しにヒロインが下校する姿があった。女子、連続殺人。その単語に、作者が言った『ヒロインが死ぬ』という言葉の思い出した僕は、作者の思惑通りに動いていることを自覚しながらも、彼女を追いかけるために走り出した。

2

世話話に華を咲かせながら彼女を送り届け、コンビニで二人分の夕食を買い帰宅すると、部屋の様子ががらりと変わっていた。

床に転がしっぱなしだったマンガ雑誌やゲーム機は片づけられた部屋は、いくらか小綺麗に、そして広く感じられるようになって、中央の折り畳みテーブルには大皿の出前寿司が鎮座している。

……ご機嫌取りのつもりだろうか。さすがに今日はやりすぎたと思っただか？

真意を確かめるべく自分以外の唯一の動体を探すと、奴やつさんはパソコンの前に陣取り、何かしらをプリントアウトしていた。

「あ、お帰り」

「……ただいま」

「テーブルのお寿司、先に食べといて。私これ印刷し終わったらにするから」

パソコンデスク上部の棚に鎮座する印刷機から目を離さずそう言う彼女に甘えて、僕は手洗いを済ませて座布団に腰を下ろした。

セットではなく好きなものを握らせたようで、やたらサーモンと卵焼き、イクラが多い。端に追いやられて縮こまっているアナゴを見つけてまずはそれを口に運んだ。

「うん美味しい」

別に貧乏学生しているわけではないけれど、姉の仕送りのことがあるだけに節制していた身には懐かしい味だ。

「そりゃよかった」

印刷を終えたらしい彼女は写真用の印刷紙を持ってテーブルにやってくる、素手で卵一卷を取って口に押し込む。「ふまい」と言った後、ベッドの上に乗って、写真を壁にテープで貼り付けた。

今更ながら気づいたが、壁には他にも写真が貼ってあって、その多くにヒロインの姿が映っている。

「何やってんだよあんたは……」

「この前の週末撮った写真だよ。一応、周りを監視しておかないといけないし、予兆がないか調べないと」

ああ、だからその作業スペースを確保するために部屋を片づけたのか。ま、こいつに男の部屋を掃除する女心的なモノは……駄目だ想像すらキモいわ。

この分だと、寿司も『僕とヒロインを接触させた記念』の祝いか何かだろう。美味しいからいいけどさ。

彼女が席に着く頃には3つ目を口に運んでいた僕は、ふとそこでこの作者に訊いておかなくてはいけなことを思い出した。

「なあ、うちの学校で貧血が多発してるのってあんたの仕業か？」

「ん？ んー、まあそうかな」

「貧血と超能力に何の関係が？」

「例によって秘密デス。ま、その内分かるって。それで？　我が愛しの娘はどうだった？」

「どうって……まあ、普通に喋れたし、性格もぶっとなではいなかったし」

『性格も』の前に『作者^{あんた}ほど』と心の中で付け加えていた僕は、その台詞に対して「そりゃ、ラノベだからって変に特徴的なキャラにするのもどうかと思うし」という彼女の言葉に全力で反論したい気持ちに駆られたが、何とか押し留めた。

「あと、もう一つ。連続殺人、こっちは？」

「連続殺人？　何、女の子が四肢切断やら内蔵摘出でもされて見なかったの？」

「いや、そこまでは知らないけど……」

というか、この作者が連続殺人を題材に物を書くとき被害者はそこまで悲惨な目に遭うことになるのか。あんまりあってほしくない物語^{かい}だ。

「知らないのか？」

「あのねえ、私はこの世界にやってきてまだ数日の身なんだから情弱なんだよ。そう言う君だって知らなかったんだろう？」

「うっ、まあそうだけど。どうも女性ばっか殺されてるらしくって、帰り際注意されたんだ。これ、あんたの言ってたヒロイン殺しに係してそうだろ」

「確かに……伏線にしちゃあちよつとあからさますぎるけど……でもそれ誰から聞いたの？」

「あ、そうそうそれだ。準ヒロインってあんたの他にもいる？」

「うん、四人ほど」

「たぶんその内の二人。この眼で見て顔が映ったから間違い……なあ、この気持ち悪い眼何とかしてくれないか？　落ち着かないんだ」

「ん、まあそれじゃあ、切り替えれるようにしてあげる」

どうしても取り外してくれるつもりはないらしい。

けど切り替え自由にしてもらえるだけマシか。要は使わなければ

いい。変に気分を損ねて心変わりされるのは嫌だしこれ以上は望むまい。

「ところでその二人の外見は？」

「金髪死んだ眼美人と黒い澆刺娘」

僕の言葉に彼女は何故か、シャリから外したサーモンの裏表ともを醤油に浸す作業を止めて怪訝な顔をした。

あともう一つついでに描写しておく、この寿司皿全部サビ抜きだった。ガキ舌め。

「何？ 準ヒロインじゃないの？」

「いや、準ヒロインで合ってる、けど。その二人が一緒？ 本当に？」

「それが？ 仲良さそうだったけど？ 金髪さんの方も見た目に反して話すと普通そうだったし」

「そんなはずがないんだけど……『鉄面皮・無口・話せば毒舌』の可愛い女の子のはずなんだけど」

そののどが可愛いのか小一時間ほど聞いただいたい。あと、そんな準ヒロインを乗りこなせる自信もない。

「それに、その二人の仲は険悪なはずなんだ」

「そう設定されてるから？」

肯く奴の仕草に思わず溜め息が出る。人間関係すらこいつの手の平なのか、僕らは。

「しかし……気になるなあ、それ。うーん、よし！ 私も——」

「勘弁してください」

「……まだ何も言っていないじゃないか」

「どうせ学校に行くとか言い出すんだろう？ 本当、勘弁してください」

「勘弁しません。……っと、へえどうやらビンゴらしいよ」

先ほどからケータイをイジっていた登場人物の心情お構いなしの作者様は、そのディスプレイを見せてきた。そこに映っているのは

例の連続殺人の記事で、被害者らしい顔写真が数枚表示されている。

「三人の内二人は準ヒロインだ」

思わず息を飲み、画面を見返した。三つある写真の内どれかは分からない。だけど、そのどれも美人で、その内二人は自分と同じ登場人物だと言う。そんな人間が死んでいる。

この何を言ってもふざけた感じの抜けない作者の言葉をどこか真剣に受け止められずにいた僕は、今更ながら『ヒロインの死亡』というラノベでは特殊なケースを除いてあり得ないような事象、それも作者の意図とは別の所で蠢いている『何か』の存在をリアルに捉えることになっているらしい。

「しまったな……ヒロインの方ばかりに目がいった。そうか、考えてみれば君に貸した眼でもない限り、ヒロインかどうかなって本来なら見分けがつかないはずなんだ……しかしそうなると準ヒロインの方も監視した方が……いや今一番怪しいのはその残り二人なのか」

何かブツブツと言いつつ出て彼女の手が止まっているのをいいことに、好物らしい卵を三つほど自分の小皿に取る。

ヒロインを助けるという点に関してはいくらか協力したと言えるし、物語の中の人物である僕としては、筋書きの改変^{メタ}という高次な話は作者に任せるに限る。誰がどうやってまだ応募もされていない作者の公募作に紛れ込んだかは知らないが、僕にはそもそも荷が重すぎる。

ふむ、そう考えれば真っ向から拒否するのではなくて、協力する振りをして極力関わりを避けた方が頭のいいあらしい方だったのかもしれない。

髪型が姫カットだからかは知らないが、お嬢様キャラなのか金銭感覚がぶっ壊れてるこいつは体のいい財布代わりになる。自分で結構性根の腐った考えだとは思うけれど、そう考えないとやっていけないほどコレの性格は悪いのだ。

襲来以後に利益になったことといったら、お金の心配がなくなっ

たことと部屋が綺麗になったことぐらいで……待て、そういえば壁に貼られた写真はマイナス要因だ。面識があるとはいえ、どう見ても盗撮された写真をベッドの際の壁に貼る人物。それじゃあまるで……、

「なあ、写真を壁に貼るのはやめてくれないか？ 誰かに見られるとまずいだろ」

この部屋はワンルームしかないだけに、玄関から中の様子が丸見えなのだ。それこそ寿司の出前もそうだし、宅配便、お隣さんや大家さんに見つかったら通報されかねない。そしてその際、疑われるのは女の姿をした奴ではなく僕の方だ。

「大丈夫大丈夫、もしそうになったら私は目隠しと猿轡と手錠をかけるから」

「はい？」

その意味を理解しきれないでいる僕に、彼奴はまず壁のヒロインの写真を指して言った。

「ストーカー被害者」

次に自分を指し、

「監禁被害者」

最後にその指を僕に向けた。

「ストーカー及び監禁犯罪者」

「……………」

この世にそんな酷い冤罪があってもいいのだろうか？

最近、『悪魔』や『外道』よりも人を貶しめる表現を教えてほしいと切に思う。

3

「掛郡詩穂です。好きなものはパズル、趣味はお菓子作り、3月3日生まれのお座です。よろしく願いますっ」

次の日。予告通り僕の高校、それも僕のクラスに転入を果たした

悪魔は、実にらしい仕草で頭を下げクラスの皆から好感触を得ていた。

新学期早々の転校についての質問に、「ちょっと準ヒロインに会いに」とは当然言うわけにいかず、適當すぎる嘘をうふふと笑いながらドバドバ吐く彼女を見て思うのは次の一言に限る。

誰だお前。

猫かぶりすぎて気持ち悪いわ。

何が趣味はお菓子作りだよ。あんた、食べ物なんて栄養が採れば味なんてどうでもいいって言ってたろうが。

最悪な本性を笑顔の下に隠しているとは知らずに話しかける生徒を見て哀れに思う一方、作者の視点というやつで見れば連中は皆して脇役だ。登場人物を際立たせるためと考えれば、高校生にもなつて転校生に対するリアクションが激しすぎるのも肯ける。全てが全て予定調和、いやお約束通りテンプレートに展開するのがこの世界。

やっぱりこんな眼は、切り替えができてもおきたいモノじゃない。あると意識するだけで嫌な思考にはまり込んでしまう。

ラノベにおいて学園はボーイ・ミーツ・ガールの絶好の場とはいえ、授業内容の描写には価値がない。あれよあれよと時間は過ぎて、放課後がやってきた。

他の生徒が都合よく全員出ていった後、学校にまで侵攻を果たしたインベーターは口を開いた。

「さて、それじゃあ問題の準ヒロインの所に行ってみようか。連中は2年5組だ」

またもや変わった口調に酔いそうになるが、こいつのことで一々反応していたら身が持たない。口に出して余計な言葉をもらうのも馬鹿馬鹿しいので素直についていくことにする。昨日の感じからして少し癖はあっても悪い人ではなさそうだし、ヒロイン殺しについては気にはなってるのだ。

何せ目的が分からない。この世界が作者の頭の中に存在している以上、作者に都合の悪いことは本来起こらない。だから連続殺人が

美少女狙いのただの快楽犯に因るものではないと断定できると前に作者は言っていたのだが、ならば少なくとも犯人はこの世界が物語であることを認識して行動しているはずだ。

犯人は何を思っただんなことをしているのだろうか？

それがはっきりしなければ、最悪自分の身にも災難が降りかかる可能性を否定できない。今はヒロインだけかもしれないが、主な登場人物という括りでは自分も同じ立場なのだから。

彼女をうまく利用して、犯人の真意を突き止める。それが最良の策だ。

急な転校で教科書が用意できなかったという言い訳の元、筆記用具だけを入れたかっるい鞆を振り回して『早くしろ』と訴えかけてくる奴に応じて、自分の重い鞆を肩にかける。僕が歩きだしたのを確認してから前のドアをスライドさせた彼女だったが、廊下に出ることはできずに扉の前に立っていた人物とぶつかった。

「あ」

金と黒、長髪と短髪。昨日会った二人組。

創り親に言わせれば『鉄面皮・無口・話せば毒舌』であるはずの死んだ眼さんがこちらに微笑みかけてきて、――そして作者ごと掛郡詩穂ちゃんの顔面を握り拳でぶん殴った。

見事なフォーム。容赦ない顔面狙い。躊躇の一切見られない渾身の一撃だったことをここに記する。……じゃなくて。

いやいやいや待って待って！ 何だ、何が起きた！？

笑いかけてきてからの……顔面パンチ？ 何ソレ状況に全然着いてけないですけどっ！

当たった瞬間ベキッていったぞ。中身はともかく女の子の身体に對してやる攻撃じゃない。勢いよく後ろに転がっていった作者の顔は鼻血で赤く染まっていた。粘膜を傷つけただけならまだいいが、あれはもしかすると鼻の骨が折れているかもしれない。

これはさすがに……作者めざまあみろ！ じゃない、いい気味だクソったれ！ じゃない……、

「いいぞもつとやれ！」

駄目だ本音がだだ漏れになってる。僕も大概酷い奴だな。いや、ここはそれほどストレスが溜まっていたと見るべきか。

呆然としている、という演技を今更始めた僕の前で、金髪ちゃんはダウンしている奴の右足を取り引きずり始めた。早歩きで教室から去っていく二人を追って僕も廊下へ出た。

「ま、待って！」

一人を引きずってるにも関わらず彼女達はかなり早いペースで進んでいく。目的地があるのは明白だ。それがどこなのか見当をつける前に、彼女らは理科室の前で立ち止まった。本来なら鍵が閉まっているはずのドアを開けると、中に作者を放り込んで自分達は距離を取る。金髪ちゃんの手から紫電がパチンと走ったかと思うと、理科室が爆発を起こした。

轟音に耳をやられてうずくまり、何とか立ち上がれるほどにまで回復して顔を向けた時には、作者のいるはずの教室は轟々と燃え盛っていて、黒く焦げた塵が舞っている光景が目映るだけで……あれか、「もつとやれ」と言ったのがまずかったのか。

待て、冷静になれ親衝！ おそらく先にガス栓を全開にしてガスを溜めておいたんだ。つまり事前に準備がなされていたわけで僕のせいではってアホかそういう問題じゃないだろ！ やばい僕も僕でかなりテンパってしまっておかしな状態だ。

ヒロイン殺しについて事前知識があったにせよ、まさかまだ明るい内に学校で、それもあんなド派手な手段でもって人を殺せる人間がいるだなんて予想の範疇を越えていた。連続殺人だからこそ、形振り構わず襲うなどとは想像もしていなかったというのもあるし、まさか人がこんなに簡単に人を殺せるモノだとは思ってもいなかった。

何にせよこの分じゃ作者は生きてはいないだろう。

そう思った時だった。

ゴシヤン、と原型を留めていない赤と黒の室内で音がして、人影

「あーあーあー、全く！ やってくれたなクソったれ共！」

顔面パンチ、爆殺という怒濤の展開に既についていけなくなつて

だけれど、これをやった本人達はこの展開までは読めていたらしい。

「そう簡単に死んではくれないか」

……しかし、そこかあ犯人はコロロちゃんとかラリちゃんかあ」

対して金髪死んだ目美人さんは心底愉快そうに口を開いた。

前に「目に反して話すと普通そう」と言ったけどアレ撤回。顔を

「……さあ、そろそろ年貢の納め時だ下種野郎」

38

た。ぐべつと嫌な悲鳴を上げた作者に更に横っ腹を蹴っ飛ばすという容赦ない一撃を加えて、彼女はニヤリと口角を吊り上げた。

「はんっ、どれほど身体のスベックが高ろうと思った通り中身は所詮運動不足！ 死にくいその身体はむしろ好都合だ。カラリ、こいつ殺し放題だぞ」

ヤバイ。何が何だか事情がまるで飲み込めないが、どうも彼女らは本気で殺し続ける気だ。作者がどうやってあの爆発から死を逃れたのかは知らないが、超再生にしろ何にしろ痛覚があるのは見たら分かる。苦しめるのが目的の相手に丈夫すぎる身体はマイナスにしか働かない。

ここにきてやっと、呆然と動けずにいた身体を動かすことに成功した僕は、依然作者を踏みつけている凶悪犯に身体をぶつけた。やたらと暴力に慣れている様子とはいえ、思ってもいなかった攻撃に女子高生の身体は弾かれてカラリさんの方へ転がる。

いくらこの作者が横暴で性格の悪い人間の屑とはいっても限度がある。

ぐったりしている彼女を起こすと、彼女は苦々しげに言った。

「さっさと逃げるぞ。分が悪すぎる」

散々蹴られて彼女もその辺はよく理解したらしい。肩を貸して廊下をあの二人とは逆方向に進むが、ここは二階だ。階段が一番の難関だな、時間を食う。

「それにしても……何なんだよあいつら。昨日とはまるで違うし」

「それは猫被ってただけだよ」

ああ、そういえば今朝のあなたもそうでしたネ。

「コロロとかカラリとか擬音みたいな名前で言い合ってたけど、あれは？」

「準ヒロインの名前じゃなくて中身の名前。あの二人は使い回しキヤラなんだ。……短編集なんかでA氏とかF氏とか名前のちゃんと決まってない登場人物ってあるでしょ。君の名前もそうだけど、キヤラクターの設定をその度に考えるのって手間なんだ。だから」

「使い回し？」

言葉を先取りした僕に彼女は肯いた。

「あいつらの場合は通常とは逆だけどね」

「逆？」

「名前と外見を使い回すんじゃないくて、中身を使い回してるんだ。」

二人の元々いる小説はね、ラノベなんかのお約束——テンプレート——遅刻間際

の登校中に角で運命的出会いを果たすとか異世界に勇者として召還されるとかそういうやつね——そんなのをネタにした一話完結の短編集なんだけど、その性質上一話一話で登場人物が女子高生から異世界にトリップした勇者まで様変わりしちゃうわけ。でも、その都度主人公を考えるのは面倒くさいから、いつもは『舞台裏』っていう場所において、呼び出しがかかった時にだけ開く扉ゲートをくぐって物語に出演するという設定システムを考えたんだけ。彼らはその登場人物として創り出したキャラなんだよ」

ううん、一気に話されても理解がついていかないが、要は舞台裏とかいう小説世界がまずあって、さらにそこから扉でつながる下層の小説世界があるということか？ 色々な配役を演じるために創られた外見のないキャラクターってことでいいのだろうか？

「よく分からないけど、一話毎に性格じゃなく姿形だけが変わるってこと？」

「そう。『ある時は女子高生、ある時は勇者……』、物語の登場人物役を演じるという役って感じ。まあ、憑依してるって考えてもいいけど」

「外見が変わってるはずなのにその二人って分かったのか？」

「いや、二人組で作者の存在を認めてるキャラクターって考えればあの野郎共だけだしね。むしろ気づかなかった方が愚かだった」

『あの野郎共』ね。ま、本人も『息子』って言ってたし、定まった姿がないとはいえ、あの二人の性格的な性別は男だというのは薄々分かってはいたことだけど、改めて考えてみると作者を始めとした準ヒロイン三人が皆して中身は男という混沌とした状態に今自分は

置かれていることになる。思えば思うほど全く嬉しくないシチュエーションだった。

「でもあの二人が今回この世界で、それも準ヒロイン役でやってきたっていうのはおかしいだろ。作者がここにいるのに、連中むこうもののものがたりが勝手に進むなんて。あんたが書かない限り扉ゲートとやらは開かないんじゃないのか？」

「それを言うならこの世界だって作者の意図しない方向に改変されても現在進行形で進んでる。小説の世界はその一片でも書かれれば後は勝手に成長していくものなんだ」

「それにしたって、扉ゲートがそんなに都合よく作者の大賞応募作に繋がるか？」

「世界観の共有だよ。書き手は小説を書く度に新しい世界を構築しているわけではない。さっきキャラ作りの時言ったように煩わしいんだよ、特に世界観ともなるとね。異世界モノならともかく、現代社会を舞台にした物語だと小説同士の境界が曖昧なんだ。ほら、同じ小説家さんの別の作品で、登場人物同士がニアミスしたり同じ店の名前やらがでてきたりってあるでしょ？ 読者としても嬉しいし、作者としてもやりやすい。現実世界を舞台にした小説は別の物語だとしても地続きであることが多い」

「じゃあ、今こうしてる間にも別の主人公がこの世界のどこかで活躍してるってこと？」

肯定する作者に、僕はいつそう頭を混乱させた。

現実世界からやってきたという作者、別の次元にある小説世界からやってきた擬音二人組、そしてこの世界はいくつもの小説の物語が重なり合って展開している……？

「彼らの扉ゲートはファンタジーめいた異世界に繋がることも多いけど、複数の小説が物語背景にしている現実世界がモチーフのこの世界と繋がる確率が最も高い。加えて現代社会っていうのは公募作では比較的使い易いんだ。大賞には応募作品に原稿枚数の規定があるからね。どれほどうまくプロットを練ろうと枚数制限をオーバーしてし

まっでは意味がない。物語を体裁を取るのに最小限の文章しか書けなかったり、展開を些か急にしないといけなかったり……とにかく成りたがりにとって文字数は大切なの。そういう視点で見ると、ファンタジー物は魅力になる世界観を描き出すのに文章を割かなければならない分、制限のある公募作では少しハードルが高い」

「はあ……？」

「逆の例を挙げれば学園物！ 校舎の形、教室の間取り、クラスの編成、級友との会話、卒業式の雰囲気！ 皆経験があるから詳しく描写しなくても読者はイメージしてくれる！ だからその分描写に文字を割かなくて済むっていうメリットがあるの！」

なるほど、つまり今回この作者が描写を手抜きできる学校を舞台にした超能力バトルものというよくある設定を利用して公募作を考え出したのがそれに当たるわけだ。確かにさっきから『学校の廊下』という描写以外場面についての表記、なかったもんな……。と、階段に着いた。

「物理法則、国、社会を容易に想像できる現代社会っていうのは、公募作に使いやすい。言い換えれば公募作に繋がっている可能性が高い。現実世界風の舞台にはそもそも繋がりがやすく、その世界は高確率で公募作の物語も展開している。そこにきての美少女殺し。私はラノベ作家志望だから……」

「ヒロインは皆美人。美女を殺していけばいつかはヒロインに当たる……」

「公募作の物語を改変されてしまえば作者は対応せざるを得なくなつて——ははっ、つまり私はまんまとおびき寄せられたってわけだ！」

つまりあんたが狙いだつたと。作者とキャラクターで何やってんだあんたらは。そんな親子喧嘩に巻き込まれた僕が一番貧乏くじだよな！？

「元々あの準ヒロイン二人は別の物語で考えてたキャラクターでね。新しくキャラクターを練るよりは性格設定も固まつてる奴を使った

方がいいと思って、それを君の物語に流用したのがまずかった。まさか、物語の根幹に関わってくる準ヒロインとして介入されるなんて……。きつと昨日の設定追記で気づかれたんだ。今まで普通の生徒だった人物がいきなり生徒会員に……この世界の外の人間であるあいつらなら設定の上書き現象を観測できたはずだ！」

「設定が変更されるのは登場人物だけ、それも男となれば主人公の可能性は大、と。それで会議の後僕に会いにきたのか。意味深なことを言って作者を釣り上げるために」

「全く悪知恵ばかり働かせやがって！」

「まあ確かにすごい執念だよな。そこまで回りくどいことをして……何でそんなに恨まれてんの？」

そう訊いた途端、彼女は顔を反らした。どうやら思い当たる節はあるらしい。

「……………ほら、言ったじゃん、お約束をネタにした物語の登場人物だって。例えばさ、前に挙げた登校時の運命的出会い。あれの場合、勢いよく飛び出して車にひかれちゃうって感じのオチで？色んなテンプレを皮肉ってその度に死オチさせてたんだけど……どうも……」てへつと笑いながらこやつは言った。「ちよつと殺しすぎちゃったみたい」

「自業自得じゃねえ——かああああ！！」

こ、こいつらどっちもどっちだ！

「というか、さっきから気になってたんだけど、コロロとカラリつて名前からして適当だもん……」

キャラクターとしての先輩方の不遇に滲みそうになる涙を堪える僕の呟きを聞いて彼女は不服そうだった。

「失礼な！ 結構気に入ってるんだよ、甘露頃アマツユ結コロロと星ホシ餡アメ空カラリ李リって名前。つける当時、甘露飴と金平糖が食べたかったからそうつけたんだけどね」

「よかった……！ 僕、小林親衝で本当によかったあ……っ！ っ
て、そりゃ不満も溜まるだろ！？」

「そうは言うけど、この身体の『掛郡詩穂』KAKARIGUN
SIOH』だって、私のペンネームの『黒咲彼岸』KUROSA
KI HIGAN』の単なるアナグラムで、大して思い入れて名
付けたわけじゃないし」

いや、例えばあんたが自分も含めて平等にぞんざいに扱おうと、コロロとカラリだけはない。つけた方は満足かもしれないが、つけられた方が可哀想すぎる。

「いや、まあそれは今は置いておこう。追われてる現状で問題なのは物語の準ヒロインとして組み込まれている以上あいつらにも能力があることだ」

「コロロさんの方は電気か何か？ 静電気っぽいのを出すのを見たけど」

「うん。死んだ目電波娘のはそのまま【鰻^{ウナギ}】って言って、電気系統の能力者」

【鰻】ってデンキウナギからか？ 能力名ってそういう感じでつけてるのだとすると、僕の【鯢】もサンショウウオ総じての特徴というよりサンショウウオに属する特定の生物からつけた名前なのかもしれないが、さっぱり思い浮かばない。

「カラリさんの方は？」

「あの澁刺娘の準ヒロインは——」

と、それに続けて肝心の台詞を口にすることは彼女にはできなかった。

いや、もう二度とできなくなったと言った方が表現としては正しいだろう。

折り返し階段を降りきり、廊下に出て右、昇降口へと繋がる一本道を進もうと角を曲がったところだった。いきなり床から白い刃がいくつも……そう剣山のように生えて隣に並んでいたすでにポロボロの作者を串刺しにしたのだ。

右太股と腹部、それから左胸を貫通。

温い血を浴びて、僕は思わず飛び上がって尻餅をついて、『少女

串刺し』オブジェから後ずさる。爆発からも生き延びた彼女は、今度こそ力無くその体を刃渡りメートルを越す凶器に身を預け、しかし垂れ下がった顔で目線だけこっちに向けながら、改めて台詞を続けた。

「あいつの能力は【珊瑚】。石灰質を合成する力で……見ての通り鋭く加工もできて、自分の近くならどこにでも出せるという極めて殺傷性が高い厄介な能力だよ。で、私の能力【落ち葉】もまたご覧の通り」

不死身。そのどこら辺が【落ち葉】なのか、僕には想像がつかないが、しかしこの分だとあの爆発の際も耐えきったというよりは、やはり直撃して死んで生き返ったというのが本当のところらしい。

つまりすでに2回殺されたということで、今回殺した張本人は僕らが向かおうとしていた廊下から現れた。先回りされたらしい。二階なら窓から飛び降りることはできるし、そもそも肩を貸しながらの移動だ。普通に追いかけても追いつかれたに違いない。

黒髪をさらりとなびかせて、してやったりと得意げな顔をするカラリ先輩は見た目は可愛らしい少女なのだけれど、やったことが殺人行為なのだから困る。

どうやら石灰質を合成できといっても、時間が経つと消えてしまいうらしく、どばどばと流血していた作者は剣山から解放されて床に俯けに倒れた。その後、映像を逆再生させた如く血が身体に戻っていくというホラーな方法で復活した作者は立ち上がって言った。

「本当、容赦なくやってくれるよね、君達……はっ！」

言い終わるのと同時に、ゾンビな彼女はカラリさんに向かって走り出す。残り数歩の距離までは接近に成功するも、彼女の能力の性質上ただ近づくのは愚の骨頂だ。当然のことながら、足下から生えた鋭い刃に足を床に縫いつけられ、横っ腹にも痛い一撃を食らう羽目になる。が、そこで止まらずに馬鹿作者が手にしたのは廊下脇に置いてあった消火器で、それをひっつかむと傷口が広がるのを無視して一回転、自分を殺した少女の頭を思いっきり殴りつけた。

こっちもこっちで容赦ねえ……。

いっそ清々しいほどの音を響かせてぶっ倒れ彼女はそのまま痙攣すらすることなく動かなくなった。

「ざまあみろ、運動神経がないからって油断してるからだ」

本当に死んでしまったらしく、剣山もカラリさん自身の身体も光の粒になって消えてゆく。その様子を見て何やら作者が首を捻ったところで――今度は横から、一振りの剣が彼女の横っ腹を串刺しにした。

「うぶっ」

吐血して倒れそうになりながらも踏ん張り、白い見覚えのある刀身が突き出された方を見れば、職員室のドアがスライドしていて、そこから死んだはずのカラリさんが剣を握っている。

えー……と、本日何度目の驚愕だ？

作者も不死身で、カラリさんも不死身？ でも作者がそうであるのは能力によるもので、カラリさんの能力は【珊瑚】だったはずで………訳が分からない。

けれど、作者の方は何が起こっているのか理解したらしく、苦々しく顔を歪めていた。

「そうか……それは予測しとくべきだったなあ」

「甘いのはお前の方だったわけだ」

「ははっ、違いない」

力無くそう言いながら作者は倒れ、

「けど、甘いのはお前もだ」

カラリさんの顔に消火器の粉が吹きけられた。

煙たい僅かにピンク色をした粉で廊下が覆われる中、腕を捕まれ、僕と自業自得な外道はようやく校舎の外へ出た。

校門近くに市バスがきているのが見えて指を指す。

「追ってこない内にアレで逃げよう！」

だが、僕の提案に彼女は首を振った。

「駄目、さっきからコロロちゃんの姿が見えない」

そう言われて、思い出した。カラリさんも十分過激で忘れていたけれど、作者を爆殺したさらに過激な金髪コロロさんが追ってこなかった。思えばカラリさんに足止めされていた間に追いついてもおかしくないはずだ。

「たぶん、カラリちゃんじゃ取り逃がすと踏んでバスに先回りしてる」

「あの二人仲が言い訳じゃないんだ？」

「どっちかっていうと腐れ縁、いや主人と下僕かな？　いつもコロロちゃんがカラリちゃんを振り回してる感じ」

あー、つまり正しく僕と作者の関係と同じってわけね。……自分で言ってる悲しくなるけど。

「じゃあどうやって……」

逃げるのか、そう尋ねようとして彼女の方に振り向くと、すでに彼女はその当てを見つけたらしく、駐車スペースで今まさに帰ろうと車に乗らんとする男性教員の頭を、まだ持っていた血のりつきの消火器で強打した。

「……………」

倫理観って一体何なんだろう？

手招きする彼女に躊躇しつともついていき、助手席に座って当然の質問をした。

「運転できるのか？」

「いや？　でも、こういうのは大体シフトレバーを引いてペダルを踏めば……」

そう言って彼女はブレーキペダルを踏み、シフトギアを……バックに入れた。

動かない様子に首を捻って、もう一つのペダル——つまりアクセルペダルを踏んだ瞬間、車は後ろへ。

後部ガラスが割れる音を聞いて、甚だ不安を覚え、そして今更気がつく。

何で僕は作者について行っているんだ？

第二話 一使い回しキャラの悲劇・前（後書き）

以下、物語の分かりやすい要約

カ「円環の理に導かれて・・・ソロモン（悪魔）よ、私は帰ってきた！」

コ「ティロ・フィナーレ（爆殺）！！！」

作「こんなの絶対おかしいよ」

主「わけがわからないよ」

なお、作者は例の魔法少女詐欺事件簿を一切見ておりません。
見たいんだけどなー。

コロロちゃんとカラリちゃんについては同作者の『語るモノには気をつけろ』をご参照いただければ分かりやすいと思われます。

あと、作者キャラ『掛郡詩穂』の外見はどこぞの眩き診断を参考にしました。

私の趣味ではありませんよー。

キャラメイキングにかかった時間は約3分。

さて、2話の時点で既に状況がカオスですが、このノリのまま突き進みます。

第三話 一使い回しキャラの悲劇・後（前書き）

実験… もし自分の小説で自分が一方的に殺される描写を書き続けたらどうなるのか？

結果… ころは いたい。

以下、よく分かる気になれる要約ッ。

コ「明日学校休んじゃ、嫌だよ？」

作「いや、爆発の影響で閉鎖だよ……」

コ「嘘だッ!!」

コ「詩穂ちゃん、見いつけた」

作「遊ばれてあげるわ……おいで鎖鋸女」

コ「ひゃあああああッ!!! 一撃で叩き割ってあげるよおおお おおッッ!!!!!!」

作「あ、やっぱタンマ。無理ムリッス」

コ「あははははははははは！ 詩穂ちゃんは殺されちゃうよ、怒ったコロロちゃんにきつと殺されちゃう!!」

作「ねえ、ちよつと……頭ぶっ飛び過ぎてない」

コ「僕は最初っから楽しいよ！ でも詩穂ちゃんの頭を叩き割ったらもっと楽しいかな！ かなあ!!」

カ「ちよ、ねえ俺もう帰っていいですか？」

コ「くけけけけけけけけけけけ!!」

主「嫌な……事件だったね」

———ホームセンターを遊びつくしました。

第三話 一使い回しキャラの悲劇・後

ヒロイン殺し犯の狙いが作者であり、キャラクター殺しが作者をおびき寄せるための作戦であることが知れた時点で、さっさとあの歩く自業自得など放って置けばよかったのだと気づいた僕だったが、暴行及び盗難、つまりは強盗行為の上に無免許運転の、おそらく共犯扱いにされる気がする現状、作者から逃げ出すのも手遅れだろう。

それら違法行為のオンパレードに対して、紙の上での運転フィクションだからペーパードライバーというギャグにしてもセンスがなく、冗談にもならず笑えない発言をした作者に運転センスはなく、灌木に突っ込み、歩行者用信号機に突っ込み、歩道に乗り上げ、逆走し、それでも何とか運転と呼べる走行にまで車を操作できるようになった時には、あちこちにぶつけられた車は廃車寸前で、これまた巡回中のパトカーに見つかったら追いかけられること必死な状態だった。

理科室爆破や剣山というあまりにもぶっ飛んだ人殺しを見た後で、神経が麻痺してしまったのだろう。もし本来の僕なら、狙われる原因が彼女の自業自得と分かった瞬間見限っている。

ボロボロの車体を眺め、血に濡れた制服を見て、ほぼ裸の状態で運転席に座る元凶に振り返り、溜め息を吐く。家出中の幸せは搜索願いを出しても見つかりそうにない。

仕方なしに気分転換を兼ねて、ずっと気になっていたことを訊くことにした。

「それで……何でカラリさんは生き返ったんだ？ あの人の能力は

【珊瑚】のはずだろ？ それとも複数持ってるのか？」

「いや、原則能力は一人に一つだよ。あれは使い回しキャラとしてのあの二人の性質。言っただでしょ？ 一話毎に死オチさせてたって。あいつらは舞台裏……まあ、内装は喫茶店みたいな空間なんだけど、そこに常駐していて、話が始まるとそこにある特別な扉の鍵が開き、小説世界に行くわけ。そこでテンプレートに関する課題、例えばさ

っきの『遅刻間際の運命的衝突』なんかが与えられて、それを再現しようと試みるっていうのが物語の骨組みでね。小説世界から抜け出すには、テンプレを成功させるか、あるいは失敗して死ぬかしかない。逆に言えば、死ねば舞台裏に戻ることになるわけだから、そこからもう一度扉をくぐれば小説世界に行くことができる。その自分達を縛る設定をうまく利用してるんだと思う」

「また随分と面倒な話だ……、ああだから、死体が一端消えて、職員室の『扉』からでてきたのか。ん、あれ？ でもそのサイクルを輪廻のように繰り返してるとしたら、死んで戻ってきた時には扉の鍵とやらは閉まってるんじゃないのか？ というより、例えばこじ開けられたとしても同じ世界に繋がってるとは限らないだろ」

「うん。本来ならそうなるはずだけど、扉の鍵を閉めさせず、かつワープ先を返させない方法はなくもないさ。要は扉さえ閉じないようにすればいいんだから、ドアストッパーでも挟めばいい」

……まさか転生の秘訣がドアストッパーにあったとは。ダライ・ラマもびっくりだろう。

「しかし能力に加えて私とは別の不死身ときたか。勘弁してほしいよ」

「確かにあんたにとっちゃ厄介そうだな。ただでさえ向こうの方が強いっばいのに」

「いや、そういう問題じゃなくて、キャラバランスの方。この世界じゃ能力は一人一つってことになってるのにさ……」

「キャラバランス？」

「あー、よーするに強さのバランス。ほら、これ超能力バトルモノだからさ、敵側と主人公側の戦力的なバランスってあるじゃん？ ゲームで他のキャラと明らかにステータスが違うキャラがいたら、ゲームバランスが崩れて面白くなるのと同じ。この物語はあくまでも賞に応募するために……読者を楽しませようと書いてるんだから、そういうとこ気にするの」

「なるほど。準ヒロインを殺されて物語が改変されるのもいい迷惑

だけど、同時にあの人達も準ヒロインである以上、派手なことをされるのも困るわけだ。真性ヒロインより目立たれるのもまずいし、主人公以上のハイスペック持ってるのもまずい」

「そーいうこと。最初は異端子を排除すればいいと思ってたんだけど、登場人物の身体を乗っ取ってるあの二人は排除できない上に、無闇に殺すことも避けないといけない。死んで舞台裏に戻ったら、足の腱を切ろうと手の骨を砕こうと初期化して健康状態も元に戻っちゃう。かといって、拘束したところで口や手が使えなくても能力を使えば自分で死ぬるからこれも無意味……唯一有効そうな足止めは意識を刈ることだけど、そんな器用なこと私できないし」

「何というか、完全に羽目られてるよなー」

「だよなー、ここまでくると笑えてくるよ。こっちの手札は【落ち葉】ぐらいしかないのにさあ、と……よし着いた」

その言葉に会話中見ていなかった車窓の外に目をやると、ホームセンターらしき看板が見え、車は駐車場に入られることなく路上に止まった。まあ、作者に駐車スキルなんて望むべくもないし、フレームもボコボコで後部ガラスまで割れているような車を堂々と駐車しても厄介事になるだけだ。

何にせよ、これでとにかく犯罪臭漂う車から解放される。精神的にも物理的にも窮屈な場所から出て伸びをすると、何とも言えない心地よさがあった。

だが、彼女の方は車から出ようとせず、それを訝しがった僕に財布を投げつけてきた。

「何これ？」

「服買ってきて。いくら何でもこんなズタボロの服じゃ店内に入れない」

「いや、うん、服ぐらいは調達してもいいけどさ……僕正直これ以上あんたにつき合う必要ないよな？ 買ってきたら帰っていい？」

「アパートに？ やめた方がいいと思うよ、最悪さっきみたいに爆発させられることも有り得るし」

「いやいや、その手は食うかよ。あの先輩方の目的はあんたへの復讐だろうが」

「そうだね。でもその復讐には二つ方法があるだろう？ 私を直接痛みつける方法ともう一つ、公募作であるこの物語をめちゃくちやにすることも復讐の手段になる。私が身を隠して見つからないと踏んだら、コロロちゃんとカラリちゃんは躊躇なくヒロインか君を殺しにかかるさ」

そうだった……。ヒロイン殺しは確かに作者をおびき寄せるためでもあるけれど、それ自体が作者に対する逆襲になっているなることを失念していた。どこまでも考えつくされた罠だと関心するも、その矛先が自分に向けられる可能性を考えるとぞっとする。

「で、でもほら、さっき僕は狙われなかったし……」

「そりゃあ、君は私のアキレス腱であると同時に、彼らにとって同じく作者に振り回されている被害者でもあるわけだし、一応気を使ったんだろうよ。私自身があいづらに物語上で殺しをさせたこともあるから断定して言えることだけど、私を迷いなく殺してくれたことから分かる通り、連中は人殺しに躊躇キアラするような性格はしていないよ？ どうする？ 私と分かれるか、まず狙われる私の近くで安全を確保するか」

「うっ」

「さあ、分かったらさっさと服買ってきて」

1

ホームセンターはただのホームセンターではなかった。家族が日曜大工やバーベキューを楽しむために備品を買いにくるというよりは、職業で大工道具を使うような人達がやってくるような、いわゆるプロ用の専門店と言った感じ。入って早々目に入ったのは工事現場で使うような作業着が天井から鎖でぶら下げられている様で、張り紙にでかかど『本職人気NO.1』と書かれていた。

閉店間際ながらちらほら見える客が屈強な男性ばかりという時点で場違い感がハンパなかったが、服を調達するという意味ではちようどよかった。通常のホームセンターなら都合のいい衣服が見つからなかったかもしれないが、ここには作業着が置いてある。

目測でサイズの合いそうなツナギを買った後、それを着た作者と改めて入店して、一度目は詳しく見れなかった店内を見回せば、やっぱりよく知っているホームセンターと違った趣があって興味が沸いた。

普通ならテントやら自転車やら木炭やらが置いてありそうなイメージがあるホームセンター。ところがここにあるのは、コンクリートブロックやら十メートルを越える鉄パイプやらプロ仕様の工具の類だ。電気ドリル各種、生コンクリートも各種、スパナやレンチもえらく広いサイズを扱っている。ノコギリやノミにカンナも当然あって、塗料もかなり大きな徳用サイズで用意されていた。

「すごい品揃えだな」

日常生活ではまずお目にかかれない品もあって、興奮して思わずそう口に出した僕に、彼女は「まあね」と肯定してから言った。

「私は武器になりそうなモノを探してくる」

「武っ……て、それがここにきた目的かよ」

「さすがに刃物ばかり大量に買い込むと怪しまれるし閉店まで待つから、しばらくは自由行動。色々見てきていいよ」

さらりと窃盗を宣言して、ツナギ姿の彼女は木材加工と書かれたプレートの方へと消えていった。ハリウッドの映画じゃあるまいし、行く先々で犯罪を犯そうとしないではないのだが、コロロさんとカリさんの能力に比べて、物語の訂正作業に役立つだろうと、丈夫な身体を望んだらしい彼女の【落ち葉】は戦闘には向いていない。

爆殺に刺殺と実際オーバークイルな攻撃をされている彼女を見ているだけに、自己防衛のためにも武器の必要性自体は否定できなかった。

というより、あまりにも作者が一方的に殺され続けたら、あの二人の興味が僕に移る可能性がある。自分で酷いということは承知し

て思うのだけど、作者にはできるだけ殺し甲斐がある役をやっても
らわないと困るのだ。

『準』とはいえヒロインを囿にしようとか、絶対主人公らしくない
思考だよな……。

ま、それはそんな風に僕の性格を作ったご本人に悔やんでもらう
として、僕は僕で身を守る術を考えよう。備えておくに越したこと
はない。

特にカラリさんの【珊瑚】、あれが怖い。目の前で作者が串刺し
になるのを見たのもあるし、何よりあの攻撃は避けることが困難す
ぎる。いきなり足下から鋭い刃が生えてくるようなものに、どう対
処しろっていうんだか。少なくとも逃げ続けられるように足は守っ
た方がいいのだろうか、安全靴でいけるか？

あれは作業中に落としてしまった重量物などから足を守るために
かなり強固なつくりになっているというけれど、実物を知らない僕
にはどれぐらい効果があるかは分からない。まあ、ないよりマシか。
そう考えて、気休め程度にしかならないとは思いつつも、作業着
コーナーに足を運んだら、見知った姿を見つけた。

ヒロインだ。真性ヒロインの阪本さん。

別に女性に飢えているというわけではないのだけど、今日一日つ
き合わされた『身体は女の子』達がことごとく過激な思想をお持ち
だっただけに、実に女の子らしい拳動で辺りを見回している彼女が
新鮮でしかない。

これじゃあ、作者の視点とやらがなくても同じだよなあ。

そういえば、してほしいとは思わないのだけど、準ヒロインとし
て介入してきたはずの作者は、女の子らしい演技しぐさをまるでしていな
いのはいいのだろうか？ 彼女自身準ヒロインとして読者に魅せな
ければならないはずだけど……いや、あの中身じゃどうせ無理
か。

ともかく、と癒しを得るためにも僕は彼女に話しかけることにし
た。ヒロインである彼女もまた、あの二人に狙われる危険性はまだ

残っているのだ。自分が作者を疑った経緯から、僕一人で事情の説明とその証明ができないのは分かっているし、話すかどうかについては作者の判断に任せるとしても、先に人間関係を構築しておくことはプラスに働くはずだ。ある意味唯一の同類^{ひがしや}同士だし。

何より、何も知らない彼女が殺されるのはやっぱり避けたい。その理由がバカバカしい親子喧嘩によるものだというのだから尚更だ。「阪本さん、こんばんは」

そう呼びかけた僕の声に、驚いたらしい彼女は肩を跳ねさせて振り向いた。

「や、え？ 親衝君？ 何でこんなところに？」

「えーと、ちょっと入り用な物ができて……阪本さんは？」

「私も同じ。接着剤とかパテとか、揃えて買うにはここしかないから。………ねえ、阪本さんじゃなくて実歩って呼んで？ すっごく他人行儀」

「え、あー実歩、さん？」

「かったいなあ。まっ、これで私達の仲も一歩前進だ♪」

性格の素体^{デンプレート}は素直クールらしく、照れもなくそう言ってくれる彼女の仕草はさっきまでの酷い出来事で汚れた心を綺麗に浄化してくれる。

だが、好意を理由なく向けられることに、彼女にそぐわないことは自覚している、取り柄のない僕としては今度は罪悪感が沸いてくる。

彼女と関わることは、自分の置かれている現状から逃避するためにも、あるいは一番収まりもいい方法である一方、登場人物であることを自覚している僕には、素直にその人間関係を受け入れることができそうにない。

本当、嫌なジレンマだよな。

「それで、親衝君は何を買いにきたの？」

「え、えーと」まさか人殺しの道具を買いにとは言えまい。「作業着、とか？」

思わず口にして、しまったと後悔した。作業着なんて普通に生活
していて必要になる機会はない。日曜大工に使うにしたってこの
品揃えはプロ仕様で、素人が買うには向かないというのは少し考え
れば分かることだ。

「作業……着？」

案の定、彼女は首を傾げている。この次にくる言葉は予知能力が
なくても分かるってものだ。「何で？」、そう訊かれるに決まっ
ている。問題はどうか返せばいいのかということ……、そのうまい誤
魔化し方を思いつくより彼女の台詞の方が早かった。

「何で？」

……どうしよう。

けれど、その救いの手は思わぬところから差し伸べられた。

「私の服が駄目になって、それでとにかく着れるものを買う必要あ
ったの。ね、お兄ちゃん？」

………いや、地獄からの使者だったかもしれない。

真後ろから聞こえた声に振り向くと、妹にしては身体の発育の
良すぎる——たわわな胸が強調されたツナギ姿をした作者が実
にイイ笑顔で歩み寄ってきていた。

「お兄ちゃん」って、だから誰だよお前はよ。女言葉がキモいし、
何その兄に懐いてる妹みたいなキャラ。別に妹属性ついけなくても
あんたのキャラはうざいくらいに立ちまくってるからな？

「い、妹さん？」

「あ、正確には実の兄妹ってわけじゃなくって従兄妹いとこ同士なんです。
掛郡詩穂って言います。えーと……」

「あ、阪本です。阪本実歩」

「あなたが阪本さん！ お兄ちゃんから話は聞いてます！」

「え？ 親衝君が！？」

「ええ、それはもう嬉しそうに——」

などなど……それはもう楽しそうに話す二人をヘタレの僕が止め
られるはずもなく、身に覚えもない僕の話がどんどん捏造されて

いく。作者よ、あんたはホント、そこまでして僕と彼女をくっつけたいか。息子にお見合い話をしつくく持ちかけてくる母親の厄介さとはレベルが違うぞ。

しばらくガールズトークに華を咲かせた後、そろそろ閉店という時刻で実歩さんと分かれる。と、その途端猫を被っていた彼女は素に戻った。

「うん、感触はいい感じかな。しかし何々？ 乗り気じゃないフリして、結構気に入った？」

「いや、あんたらのくだらない争いに巻き込むのは嫌だったしさ。それよりも、何だよさっきの。『お兄ちゃん』？ いつからあんたは僕の従妹になったんだよ」

「別にそんなのプロット帳に書き加えればって……しまった！」

「どうかしたのか？」

「プロット帳、鞆の中だ！ 学校で吹っ飛ばされて……教室にそのまま！」

ああ、そういえば教室で顔面殴られて、引きずられてったんだっけ。手から離れただろう鞆は当然教室に置き去りで、設定帳はその中と。

「後で取りに行かないとなあ」

いや、こんなのと『従兄妹』設定される前に、アレは燃やしてみせる。絶対に、だ。

「さあて、そろそろ隠れるよ。ちょうどいい場所も見つけた。こっちだ」

2

広い広い店内の明かりがガシヤンガシヤンと段階的に消えていく。本来なら見ることもないだろう、店の閉じる瞬間を身を隠しつつ眺め、息を潜め聞こえる足音が遠ざかるのを待つこと数分。閉店時間を20分ほど過ぎた頃になって、やっと人気は消えた。

やっていることが完全に犯罪なだけに緊張感が半端ないが、いつまでもじつとしているわけにもいかない。僕と違って罪悪感すら感じていないらしい作者が立ち上がったのに合わせて、自分も立ち上がる。

緊張して固まった筋肉を少し解す間にも、作者は目をつけていた物品の方へとすたすたと歩いていった。

てっきり刃物コーナーかと思っていたのだが、まずは電化製品のスペースに向かった彼女は、懐中電灯を手にとってパッケージを破り捨てた。

「本当遠慮ないよな……」

そりゃ、非常出口のマークが緑色に光ってはいいても、店内は暗く見えにくいけどもさ。だとしても使い捨て感覚で懐中電灯まで拝借するとは。

「私にとっちゃあここは小説の世界なんだから、いくらでも無理は利くんだよ。それより君も使えそうな物を片っ端からカゴに放り込んで。ホテルに泊まれればいいけど、最悪今日は野宿になるかもしれない。本当にアパートを爆破されて君の姉に気取られるのはよくないし、あの状態の車でこれ以上移動するのはまずいしね。できれば寝袋とか水筒とかがあればいいんだけど」

「だったら、普通のホームセンターの方がよかったんじゃないか？

ここ、そういうのは置いてそうにないぞ」

「近くのホームセンターがここしかなかったんだよ。それに武器を調達するならこっちの方が適してたしさ。あ、そのツールホルダー取って」

ツールホルダー……というのは、このピストルのホルダーみたいなやつでいいのだろうか？ フックで作業着に吊り下げられるようになっていらしく、銃の代わりに工具を差し込めるようにか、ゴム製の輪っかが二つほどついている。この輪にトンカチなりの取っ手部分を差し込んで使うのだろうか、いかんせ大工仕事なんてしたことの無い僕にはあまりにも縁遠い分野なのでよく分からない。

それを買いた物カゴに放り込んで、そういえば自分も安全靴は拝借しようと考えていたことを思い出して寄り道、その場で履いて戻ってみると、犯罪者詩穂ちゃんとは切断器具コーナーに行った後だった。後を追って到着した時にはすでに両手にいっぱい刃物を抱えた彼女がいて、それらを僕の持つてきたカゴに放り込んだ。一気に重くなったカゴの中には斧が数本に鉋まだ入っている。こんなもの学生が大量に買い込んだら絶対怪しまれるだろうな。

「あと手頃なナイフがほしいんだけど、さすがに工具の専門店では欲張りすぎかなあ」

「用途によるけど果物を切ったり……刺したりに使えそうなのはないんじゃないか、基本的に資材の加工用だろ、ここにあるのは」

自分の言った言葉の真偽を確かめるように陳列棚を見る。ノコギリ、糸のこ、鋏、手斧……。ぶら下げられている豊富の種類刃物達、だがその刃はやはり動かない素材に向けるように作られていると思えた。プロが拘って選べる工夫もされていて、包装が解かれた物もあるが、これ子供がさわると危ないよなあ。一応高い位置に置かれて鎖に繋がっているけれど、もし倒れてきたら———そう、まさに考えていた時だった。

ガシャンと、その擬音で表すにはあまりにも不吉すぎる大きな金音が、すぐ近くからした。

それは横にいる粗雑な女紛いから、ではない。前方。いや、より正確には棚を挟んだ向こう側から聞こえた音だ。

「え……？」

思わず漏れたのはそんな声。目は何故か近づいてくる刃物だらけの陳列棚に釘付けで、起こっている現象を辛うじて捉えることはできても、身体はまるで動いてはくれない。

気づいた作者に横っ腹を蹴り飛ばされることで、何とか難を逃れた僕だったが、彼女の方は間に合わずに倒れた棚の下敷きに。多くが包装に包まれていたとはいえ、そうでない刃物が展示されていたのは確かで、それらに押しつぶされてただで済むとは思えない。

『死んだかもしれない』、そんな僕の思考は、そのコンマ五秒後に、彼女のいた場所に見覚えのある剣山が生えたことで、『あ、死んだな』に変わった。無数に柵を床から貫いた、磨かれた象牙ように白い刃は、僅かな光に怪しく光り、赤い血に塗れている。作者の身体を通過したのは間違いなく、掠った程度では済まなかったことは血の量から予測できた。

自分を逃がすために逃げ遅れてこうなった、という事実が重く心にのしかかる前に意識を反らしたのは、柵の向こうに姿が隠れていた処刑人の一人によるケラケラケラケラという笑い声だった。

「よう、作者さんよお。忘れてないか？　僕は君から生まれたんだぜ？　……駐車場で倒れていた職員にあちこちに散乱するガラスの破片、扱えもしない車を盗んでの逃亡。さてどこに行ったのか？

戦闘経験は向こうに分がある、能力的にも相手のは攻撃に特化している。そうと分かればお前が取るだろう行動は武器の調達だ。ここは日本で銃器はない。必然的に得物は刃物に絞られる。どこから調達するか？　体術に覚えもないあんたにナイフなどの近接武器は使い辛い。せめて柄のついていてもう少し長い物、重心が切っ先にあって振りやすい、刃の重い物が望ましい……鉈か斧か、近くでそんな物が手に入るのはここぐらいのものだ。逃げられるとも思ったか——あんたの思考をトレースするなんざ他愛もないんだよ、ヴァーカ」

目の据わったコロロさんは作者が埋まっている方に向けてそう言い放ち、手に携えたチェーンスーを唸らせた。

「さあーて、たのしいたのしいーお遊戲の時間ですよー、ほらほらほらあ！　あんたの大好きなチェーンスーも用意したよう？」

作者よ、あんたなんでこんなキャラを……いや、作者から生まれ たってことはこれもあの悪魔の一面なのか？

カラリさんの方に視線を移動させると、こっちはこっちでノミとトンカチを持っていた。トンカチでノミを釘のように打ち込むつもりらしい。準ヒロインというキャラクターから逸脱しまくった二人

の姿に、もう僕は一杯一杯だというのに、さらなる追い打ちは棚の下から。

「いやいやいや、いやいやいやいや……そんなもん使ったら色々飛び散るでしょーが」

棚を持ち上げ蹴っ飛ばし、彼女が両手に持っているのは刃の広い斧で、それを構えながら言った。

「男ならスパツと手斧だよ」

今のあんたは女だし、後飛び散るとかスパツとか生々しいから言わないでください。……とは、当然口に出せない僕を責めないでほしい。狂気に満ちたこの雰囲気の中でそんなこと言えるものか。

広いが閉鎖した空間であるホームセンターに今は照明はなく、近くしか、懐中電灯の届く範囲しか見えない、闇に沈んだこの場所は不気味すぎる。閉店後、という非日常空間にただで落ち着かないが、今さっきの二人の襲撃のように、まだ何かが潜んでいるのではないかという想像がかき立てられてそら寒い。

そんな中 ведь。

片や両手に斧、片やチェーンソーとノミにトンカチを實際持った見た目美少女、中身殺人犯三人がケラケラ笑いながら対峙しているのだ。

——超能力バトルモノって設定どこいった。

どう考えても猟奇ホラーだろ、これ。お子様に全力待避を促す必要があるぞ。

と、自分達がどう見えているかなどお構いならしい御三方の内、先に動いたのは作者だった。

どう考えても危険度の高いコロロさんの方へと走り、左手に持った斧を振り下ろす。が、利き腕ではない腕の軌道はブレにブレいて、まともに狙いが定まっていなかった。当然避けるのも容易く、半歩下がってそれを回避したコロロさんに、今度は右手の斧を横か

ら思い切り打ち込む。一撃目は牽制、作者もさすがに二刀流なんぞ馬鹿げたことが素人にできるとは思っていなかったらしい。半歩の後退に続いての暇を与えぬもう一撃に、足を捌ききれなくなったコロロさんは右からの斬撃をチェーンソーで受け止めた。刃ではなく木製である取っ手部分と接した鎖鋸はガガリゴリと木片をまき散らし、防御から素早く攻撃に転じたコロロさんの蹴りが作者の腹に決まった。

何とかその痛みに耐え、もう一度右の斧を振るうが、安全靴に蹴り上げられ、手斧は切り目の付いていた箇所から折れて刃が宙を舞う。チェーンソーが彼女を袈裟斬りにしたのはその一秒後で、背中越しで僕には見えない、その切れ味を見てコロロさんは言った。

「ああ、確かに切断には向いてないな」

そりゃあ、ノコギリと同じで基本摩擦で削り取る切断機器だもんな……。本来、あれは切断したいものを固定して使うものだ。一瞬の斬撃では大して切れはしなかったのだろう。

だが、それなら弱点を狙えばいいわけで。コロロさんの行動は実にシンプルだった。

首元を狙った右斜め上からの斬り下ろし。それを、左の斧で受けようとする作者だったが、利き手でない手に力は十分に入らない。刃とノコギリが当たった瞬間に取っ手から手を離してしまい、いくらか軌道を変えことしかできなかった。結果今度は左肩を斬られ、かつ武器を両方共失うという何とも情けない状態になった作者は蹴り飛ばされて僕の方へ戻ってきた。

「……弱すぎるだろ、あんた」

一撃すら入れられないとは。

「超文化系の私に何期待しての？ 私は頭脳労働担当なんだよ」

「いや、あんた思いつきりあの二人に羽目られてるじゃん」

「いやいやいや、あいつらも私の一面だし！」

「ああ、総じて性格が最悪ってのは分かった」

「役立たずの主人公に言われたくはないね、っと」

立ち上がるついでに次は鉈を装備した彼女は、再生する身体と違って、切り傷だらけになってしまったツナギを一瞥した。

「ひっどいなあ全く、こちらら君らとは違って戦闘経験なんてありもしないってのに。喧嘩だって、殴ったり蹴ったり髪の毛引っ張ったり噛みついたり……健全な喧嘩しかしたことないのにさ」

「それだけやってたら十分だろ……」

僕の口にした呟きに彼女は頭^{かぶり}を振った。

「喧嘩と戦闘行為は違うよ。喧嘩はあくまでコミュニケーション、ちゃんと手加減して殴るものだもの。最近、あんまりしないっていうけど、喧嘩はすべきだよ。そういう加減っていうのは実際やって身につけるんだしさ。そう思わない、コロロちゃん？」

「いや、相手は全力をもって叩き潰すものだ」

「……………」

返ってきたのはにべもない応えだった。実際その叩き潰される対象であるところの作者はあー、と長い溜め息を吐いた。そして、手に持った鉈を投げつけるという、手加減も何もない暴挙に出、その後に続いて床に転がっていた包装のついたままのノコギリを片手に懲りもせずに突撃する。

さすがに回転しながら飛んでくる凶器を武器で防御するような危険を冒せずに、コロロさんは大きく横に避け、その隙に接近を試みる作者にチェーンソーを突き出した。刃も露出していないノコギリで対抗する作者との競り合いは、先輩の方に軍配が上がると思われたが、包装のビニールが鎖鋸のチェーンに絡まって不気味な音を立て始めた。

それが狙いだったらしい作者は、足癖の悪いことを先ほどの攻防で理解して、次くると予測していた右蹴りをノコギリからも手を離し、身を低くコロロさんの股を滑り込む形で回避する。蹴りつけようと上がった右足の下を潜られ、後ろを取られたコロロさんが振る向くのと、作者が投げつけた鉈を拾い上げるのはほぼ同時、とっさにチェーンソーで斬撃を受け止めたのがいけなかった。利き手の十

分に力の籠った鉋の一撃は、鎖鋸の刃を深々と切り込んで完全にお釈迦にしてしまい、刃と刃の接触に際して散った火花に怯んだことで、さらにもう一撃、作者に攻撃する機会を与えてしまう。

だが、これは複数戦なのだ。一人を追い詰めたところで、もう一人の介入があつては意味がなかった。

やっとのことで攻撃を決められるところまできた作者の側頭部を貫く、白い一撃。床から生やすのではなく、握り部分も造られたレイピアを突き出すカラリさん。

「コロロ、下がれ！」

現出限界時間をすぎてレイピアが消えていく。傷口を塞ぐ物がなくなれば再生が始まる。その前にトドメを刺したいらしいカラリさんの指示に、コロロさんが下がった。

「らっあああ！」

脳天突き刺されて意識が飛んでいるだろう作者が剣山に埋めれるのを見て、その中でズタズタになっている姿を想像してしまった。

少なくとももうツナギは使い物にならないんだろうな……。

実体をなくし光の粒と化した刃の山が霧のように漂う中で、瑞々しい音が響いている。再生能力。それもおおよそ生物らしくない、逆再生映像を見ているような不死身のあり方。いくら身体がバラバラになろうが、独りでにくつついていく。

いくら殺傷したところで結局は元通りになると知っていながら、彼女を追い回し続ける二人の考えもよく分からないが、圧倒的に不利だと分かっているながら、自分と同じく息の根を止めても蘇ると分かっているながら、攻撃を繰り返す作者も何を考えているのか分からない。

再生も完了していない内にさらに剣山を食らい、電撃まで浴びせかけられ、明らかなオーバーキルに晒された性悪作者はズタボロな姿で床に転がるも、すぐさま息を吹き返して這いつくばった。

二度の『針のむしろ実体験ツアー』を経て、全裸になった彼女の足に裾部分だった布の輪っかが辛うじて残っている様が哀愁を誘っ

ている。

年頃の、それも随分立派な膨らみを持った美少女の裸なのだけど、残念なことに色気はなく、ついでに血の気もない。突っ伏していた顔を持ち上げて、その表情が露わになるも、そこにあるのは恥辱ではなく苛立ちだった。

「あ、ああああああっくそ！ 何度も何度も殺しやがって！ こちとらギリギリのスケジュールでやってんのにさあ、ええ！？」

「はっ、随分苛立ってるじゃん。そんなに邪魔されるのは嫌か？」

「当たり前だ！ この世界^{ものがたり}を何だと思ってる！ 賞応募用の作品！

自由に書くのとは訳が違う！ ○○文字○○行○○ページに納め

ないといけないんだぞ！？ 物語も最低限の描写に削りに削って、

表現も一つ一つ文字数を気にしながら選らんで書いて、それで規定原稿数に収まるどうか！ ゲームじゃあるまいし、ルート分岐なん

であるわけないだろ。予定通り^{プロット}に進めないと……話の脱線を許せる

余裕なんてないんだよ。ただでさえ公募作は『起承転結』のしつかりした展開が求められる！ それを——」

熱弁ふるう作者の言葉を遮って哄笑しだしたコロロさんは、一通り笑い終わってから言った。

「ぷっ、ざまあ」

これが文章なら語尾に『（笑）』がついているだろうことが、ありありと伝わってくるような言い方だった。

ホント、いい性格してる。ぷっーんと何かが切れた音が作者からしたのは空耳だと思いたい。

「よーし殺そう、殺してやろう！」

苛立ちから一回りして不気味な笑顔になった作家志望は、壊れた笑い声を口から垂れ流しながら、床に散らばる選り取りみどりの切れ物から西洋斧^{ハンチエット}を拾い、それをカラリさんに投げつけた。

「はえ？」

話の流れからして、どう考えてもコロロさんを狙うだろうと気を抜いていたらしい彼女は、避けることができずに、本来絶対によっ

てはいけない危険行為をまともに食らい動かなくなった。それを確認した作者は「しゃっ!」とガッツポーズを取り、コロロさんが面を食らっている隙に、僕の腕を取って駆けだした。

「ちよっ!?! 何なんだ、殺すとか言っといういきなり逃げ出すって。言動が一致しなさすぎだろ!」

「馬鹿、体術で私が勝てるわけないだろうが。悔しいけど戦い方を変える必要があるんだよ。君、あの二人を観察して気づかなかったの?」

「何が?」

「カラリちゃんがほとんど戦闘に参加してなかったこと! ……何もしないんだからせめて見ておきなよ。主人公は読者の目なんだからさ。いい? カラリちゃんの【珊瑚】は非常に致死性の高い攻撃だけどころか制限がある。まず実体を持っていられるのは数秒だから、手持ちの武器として使うには適してない。さっき私の頭ぶち抜いた時のように、ここだっていう時にしか使えない」

ああ、そういうばそうか。斬り合いをしている最中に消滅されるのはまずいし、普通の武器としては使い辛いはずだ。

「よって、床から串刺し攻撃やら、あるいは上から刃物の雨を降らせるといった攻撃があいつの基本攻撃方法になるわけだけど、第二にそういった攻撃はどうしても味方が標的の近くにいと巻き込んでしまう」

「……だから苦手な接近戦でもコロロさんに挑んで? そうか、それだとカラリさんは手が出し辛いのか」

「まあ、元々カラリちゃんがコロロちゃんほど私を虐めることに執着していないのもあるんだろうけどね。逆にカラリちゃんを狙ったらコロロちゃんは絶対攻撃してくる。あいつはカラリちゃんが巻き添えになろうが気にしない性格してるから、最悪二人一緒に感電死だ。けれど、打って変わって一時撤退しようとする、今度はカラリちゃんが障害になる」

「離れようとすれば剣山で足止めか……それでさっきカラリさんを

無効化したわけだ」

まあ今頃、どっかの扉からこっちの世界に戻ってきているだろうけど。

「それからもう一つ、あいつら能力をあんまり使ってないでしょ」

「確かに」

もう超能力バトルってっ設定霞んでるし。

「いたぶるのが目的だから一撃必殺かつ、直接殴るわけでもない剣山や電撃では満足感を得難いんだよ。コロロちゃんが武器に頼るのもそのせいだ。蹴ったり斬ったり、要は実感の得られる方法を連中は取りたがる」

陳列棚をジグザグに移動していく僕らだったが、ここですぐ近くの棚に紫電が走り火花を散らしたのを見て立ち止まった。

「……もうおいでなすったみたいだ。よし、親衝ちゃん、君はガス式の釘打機を探せ」

「釘打機い？」

「ガス式だぞ？　それも乾電池のがいい、電池とそれからガス缶も忘れずに」

「おいまさか……ベタな方法を」

「その通り。それとガムテープだ。ないと使い物にならないから全部ちゃんと用意して頂戴。狙われる私じゃ集められない。私が囹になるからできるだけ早くよろしく！」

言うだけ言って駆けだした彼女に、答えを返すこともできない内に、またもや棚が倒れてきた。陳列されていた大小様々のナットが滝のようにこぼれ落ち、騒々しい音を立てる。走り去る足音と、少し遠目に青い光が見えたことで、とりあえず危険は去ったことを確認して、棚の下から抜け出す。

「釘打機ってどこだよ」

釘が並んでいるコーナーにあるのか？　それとも電気工具でいいのか？　必要としたこともないから検討もつかないぞ。ガムテープもって、たぶん置いてある場所がだいぶ違うんじゃないか？

暗い店内じゃ、コーナーのプレートさえ見えにくいっていうのに。「何にせよ釘打機本体がないと話にならないか……」

作者に遅れて棚を離れた僕の後ろで、また稲光みたいなものが走っていた。

3

釘打機は、例えば堅いコンクリートにガス圧で釘を打ち込むために使う工具だ。よって当然ガス缶、それと動力となる電源がいるのだが、今すぐ使いたい作者としては蓄電池ではなく乾電池が好ましい。コロロさんが使っていたチェーンソーも、おそらくは電気で動くものではなくガソリン式だったはずだ。大抵の物が揃っているホームセンターだが、充電電池の電力は最初から用意されていない。

作者の要望通りの物があるかは賭だったが、何とかすぐに使えるタイプの釘打機を見つけ、すぐさま包装箱から出して、近くに並べてある規格の合ったガス缶やらをセットする。

あとはガムテープだけだが、これは一体何に使うのか分からない。どうせロクでもないことに使うんだろけどな。

途中見つけた構内図を見たら、幸運にもテープ類の棚は近かった。ただ、懸念は作者とどう合流するかだ。ぼったり二人組に出くわせば、少なくとも持っている釘打機は奪われるだろうし、そもそもどこにいるかも……と、そんな心配は無用だったようだ。大人の身長より高い棚よりも高く、白い槍達に貫かれた作者が、さらに電流を流されて痙攣しているのが見えた。

わっかかりやすい奴だ。

だがお陰で位置はだいたい掴めた。落下時に身体がばらけてなければいいけれど。

カゴにガムテープを放り込み、周囲に気を配りつつ近づいていく。懐中電灯は消して、様子を『聴いて』みると、まあ予想通りというか何というか、作者がほぼ一方的にボコられているのだけは分かつ

た。

さて、ここからが問題だ。うまく作者だけが離れている時に合流するのがベストだけど、釘打機を投げて渡した方が僕の安全は確保しやすい。言うまでもないことだが、最優先は当然僕の安全だ。

前回もそうだったが、襲撃にあった際にさっさと自分だけ逃げればよかったんだ。なのに、僕ときたら状況に流されて、作者の手伝いまでやってしまっている。これは身を滅ぼしかねない悪い癖だろう。超能力の素質があるかは知らないが、作者の言う通り、僕は個性のいらないただの『主人公^{ほんじん}』なのだ。ヘタレで何が悪い。

ほぼ店の中央部辺り。また見えた閃光の中に作者の姿を見つけ手を振る。何とか向こうも気がついたみたいでこっちに視線が向いた。よし、後は投げるだけ。そう思ってガムテープと釘打機を手にとって、投擲フォームに入る前に、何故か作者が走ってきた。

おいてめえ、わざとだろ！ 今の二人の距離は10m。投げ渡した方が早いことに、あいつが気づいていないわけがない。

「ほらほらさっさと渡す！」

僕に抗議する間も与えず、手にしたブツを奪い取った作者は、ガムテープの包装をむし取って、千切ったテープを釘打機の射出部に巻きつけた。それから床に向けてレバーを引いた。釘が撃ち出されたのを見て満足そうに頷く。

釘打機、別名ネイルガン。釘を撃ち出すという機能から銃に例えられる、見た目も銃に近い、チェーンソーと同じく取り扱いに注意が必要とされる工具だ。武器ではないあくまでも工具である。それを勘違いしないでほしい、あれは工具なのだ。

とはいえ、間違えて空中でレバーを引いてしまえば、まさしく銃弾の如く釘が飛んでいくという危険性があるのも確かで、外国のアニメなんかで釘打機が手に刺さったり、銃のように扱っているシーンを見たことがある人がいるかもしれない。

当然そんな危ないものをそのままというわけにもいけないので、日本製のものは安全装置が付けられていて、空打ちはできないよう

になっている。大抵は射出部を押しつけて使わないと打ち出せない仕組みで、もちろんそれが僕の持ってきた物にもついていたのだが……、作者はそれを押された状態でガムテープで固定して安全ロックを外しているのだ。はつきり言って、そんな物を人に向けるなど、冗談では済まされない。

しかしそれをやるのがこの外道だ。追ってきて棚の角から姿を見せたコロロに対して、この下種は容赦なくレバーを引きやがった。

左肩、胸部右上、右二の腕。計三カ所の被弾。

その痛みに顔を歪めるも声には出さず、

「カラリ！ ヤバイ、あいつネイルガン持ってやがるぞ！」

叫んで、彼女はすぐさま今きた角の陰に戻っていった。

再生で傷を治癒できる作者と違って、死んでも生き返るとはいえ、死なないと身体の傷もそのままであるコロロさんは、怪我を無視することはできない。

バカスカ攻撃を食らいはするものの、その度に体調が初期化される作者と、攻撃はあまり食らわない代わりに、負傷すると後に響く使い回しキャラ。

もしかしたらバランス自体はいいのかもしれない。しれないのだが、相手は二人だ。戦力的にも手数的にも二倍ある。

調子に乗って逃げるコロロさんに追い打ちならぬ追い撃ちをかける彼女に、横から飛び出してきたカラリさん。正面から潰しにかかるコロロさんに対して、カラリさんは隙を狙う攻撃スタイルのようだ。

左腕による突き。よく狙った、スマートな一撃は釘打機のカス缶装填部位を貫き、今度は日本刀を模した石灰質の刃で破損した缶からは、ガスが抜ける音がした。ガス圧で釘を打ち出す仕組みである以上、もう釘打機は使い物にならない。人がせっかく用意したものをものの一分で壊さないでほしい。

ゴミと化した釘打機を離し、振り下ろされる右の斬撃を前に転がることで避けた作者は、すぐさま立ち上がって、またもや一步下が

って様子を見ていた僕の方へ。

「だから！ 何でこっちくるんだよ！」

「馬鹿か君は！ この小説は地の文が一人称、君の視点で語られる物語だぞ！ 君から見える範囲じゃなきゃ画面びんしょうに映ならない！ さっき離れた間にどれだけ殺されたと思ってるんだ！ 殺され損なんだよ！」

「知ったことかそんな話！」

怒鳴り合う最中、カーンと高い音を響かせて前方から何かが転がってきた。

コロコロと転がってくる、筒状をしたソレはスプレー缶のようで、キャップが外れていて見えるはずのノズル部分が潰潰されていた。さつきも聞いた空気が抜ける独特の音。そこに静電気の煌めきが加わった途端、超小規模ながら爆発が起きた。

爆発力自体は弱いが、危険なのは飛び散る缶の破片だ。あんなものが目や首に当たったらと思うとぞっとする。幸い狙いが隣の人でなしだから僕は直撃はしなかったけれど、いくつかの切り傷ができた。

しかし、安堵も束の間、さらに前から複数のスプレー缶が跳ねる、死神の足音の如き音が聞こえてくる。

ヤバイ、これはヤバイ！ 後ろからはカリリさんがきていてUターンできないんだぞ！

前のコロロさんに後のカリリさん、完全に挟まれた形だ。爆死か串刺しか、そんな究極の二択など選びたくない僕が必死に逃げ延びる方法を考えている中、死んでもどうってことはない作者は、足を止め僕の腕を取った。

「お、おい、何すんだ！」

「どおおりやあああ！」

僕の両手を掴んで彼女は勢いよく一回転、少女という設定とは思えない怪力によって足も床から離れるに至った僕を遠心力で投げ飛ばした。

まさしく人間砲丸投げだ。後ろで鳴り響く、振動そのものが凶器染みている爆音を、鼓膜で受け止めながら宙に投げ出され、前に金髪が見えたかと思うと今度は衝撃に襲われる。

コロロさんにぶつかったのだろう、組んず解れつ転がって、店の壁にぶつかったところでやっと止まった。

………のだが、その時には僕は顔を非常に柔らかいモノに押しつけていた。

作者の、というか掛郡詩穂ちゃんというキャラクターの豊かな胸に比べると幾分慎ましいが、それでも日本人女子高校生としては十分な大きさの膨らみ。

彼女がクッションになった僕とは違い、頭を打ちつけたコロロさんは1テンポ遅れて事態に気づいたらしい。その時には顔を上げていた僕の目に、顔を赤く染めたコロロさんの顔が映ったかと思うと、いきなり局部に激痛が走った。

作者にしろあなたにしろ、どうして局部を蹴るんですか……。中身男だね？　どれだけ痛いかわ知ってるよね！？

ちよっ、やめて！　そんなに蹴ったらホント潰れる！

あんたが履いてるの安全靴！　安全靴だから！

何でこんな時だけ乙女な反応するんだよおおおおおおお！

「死ね！　このっ！　変態！」

ゴス、ゴス、ゴスと一発一発が男の尊厳を奪いかねない蹴りを食らい、結局彼女の上から退くことすらできずにいる僕。そこに爆発の負傷分を再生し終わった作者が走ってきた。

「ヤバイヤバイヤバイ！　……て何やってんのエロ助」

「あんたの投げ方のせいだよ！」

「助けてもらってそういう態度はどう————ってそれどころじゃない！」

叫んで、自分が走ってきた道を振り返った一応僕の命の恩人は、「げっ！」と声を上げ僕の襟首を掴んで真横に飛んだ。

まさに間一髪、今さっき自分が男を失いかけていた場所に、白い

ニードルを無数生やしたカートが壁へと激突、カゴに重りを乗せているからか、かなりのスピードで迫ってきたそれに反応しきれずに逃げ遅れたコロロさんを串刺しにして、さらに赤い火がちろつと見えたかと思うと、スプレーの簡易手榴弾とは比べものにならない爆発を起こした。

「……カゴには何が？」

「たぶん黒色火薬だろうね。農作業に使う肥料や農薬で簡単に作れちゃうし……ああ話してる余裕はどうもなさそうだ！」

聞こえる足音に、爆風を食らった身体を労る暇もなく立ち上がる。起き上がっていた作者は爆発で崩れて開いた壁の穴を蹴り広げていた。さっさとそれを潜って進む彼女に習って穴を通ろうとしたところで、足に鋭い痛み、見れば穴を塞ぐように店内側に咲いた白い刃がふくらはぎを浅く裂いている。

もし、本当にあと少し遅れていたら死んでいた。

まるでギャグのように、何度も致命傷を受けては生き返る、そんな連中につき合っていると忘れそうになるが、僕はただの人間だ。足を怪我をただけで痛みで動けなくなるだろうし、心臓じゃなく、いい、お腹を刺されただけで地面に伏せることになるだろう。

そんな、リアルな死の恐怖に惚けている間に、壁の穴を塞ぐ白色は粒子になり消え、その向こうで右腕を突きだしているカラリさんの姿が見えた。攻撃姿勢だ。しかし、【珊瑚】という能力の恐ろしいところは、その攻撃がどこからどんな形でくるのかが分からないことである。床からくることが多いとはいえ、天井からこないとは限らない。

避ける方法が分からない、だがとにかく避けなければいけない、ということだけは肌で感じ取った僕は、無我夢中でとにかくその場から横っ飛びした。

無意識に目をつぶった、何も見えない世界で、何かが破壊される鋭い音と鈍い音の両方が混じり合った騒音を聞き、恐る恐る瞼を開けると、見えたのは両刃型の石灰質の束が穴を拡げてまっすぐと突

き出されている惨状。

「畜生！ 今の攻撃完全に僕を狙ってたぞ！？」

「釘打機を君が用意した時点で敵認定されたんでしょ！」

「があゝ、やっぱさっさと逃げればよかった！」

周囲に視線をずらし、自分の潜った穴の先がどうやら廊下らしいと認識して、ならばこのまま走れば出口に辿りつけると淡い期待を抱く。が、早速立ち上がりとした頭に衝撃を食らって、床に口をつける羽目になった。ガンガンと響く頭を押さえ、何が起こったのか確認すると、ボンベが倒れてきたらしく、その1m以上あるボンベには『プロパンガス』とかかれていた。加えて、後ろから不気味な音がしだして、振り返ればもう一本あったボンベが壁に固定されたままの状態で、ちょうど穴と直線上の位置にあったソレが貫かれて中のガスが漏れているのだと分かった。

引火したら大惨事は免れまい。というか、あの二人組は死んでも転生できる上に――――静電気を起こせる能力まであるのだ。この期に及んでヤバイヤバイとしか言えないのは僕のボキャブラリーが少ないせいだが、しかしこの状況は一等ヤバイ。

さっき死んだコロロさんがどこのドアからこっちにやってきたのか、今どこにいいのか分からないが、近くにいることは間違いない。早く逃げないと爆死することになる！

そんな僕とは対照的に頭のネジが五、六本抜けている作者は、僕達を通った時よりも拡張された穴を、今まさに潜ろうとしているカラリさんに向けて、固定具から外れて倒れてきた方のボンベを足で転がした。

カラリさんはそれを跨ぐ形で避け、ボンベは店内に。避けようと、注意がが足下に逸れ、片足が浮いた瞬間を狙って作者のタックルが彼女に決まる。

一度潜った穴を再び通る形で何故か店内に戻る作者。それを見て、一瞬ここで別れようと思ったが、廊下の方からコロロさんのモノらしき足音が聞こえて止むを得ずついてく。

「なあ、逃げようぜ！ あいつらと遭ってからずっとやられっぱなしじゃないか。それにいくら何でもこの場所は危険すぎる！」

現在進行形でガスが充満し始めている上、発火のきっかけはありあふれている。スプレー缶しかり、コロロさんが別に意図しなくとも能力を使った瞬間ドカン、というのもありうる話だ。十分な広さがある空間とはいえ、いつガスに引火して爆発を起こしてもおかしくはない。

「そうはいかないね！ あの馬鹿共に一発でかいのをお見舞いしてやらない限り溜飲が下がらない！ それにまだ手はあるし！」

「いい加減、往生際がわりいよ！」

走りながら怒鳴り合い、着いた場所は接着剤の棚。そこから普通ではまずお目にかかれない大きさの徳用チューブを持ち出した。蓋を取り、それを手にしたまま駆けだした彼女は、床に中身の粘着材を垂らしながら移動していく。

「そんなベタなのが効くか？」

「少しでも足止めになればいいんだよ。ホントの目的は塗料コーナー。塗料缶がほしいんだ。でも塗料関係となると、近くにスプレー塗料もあるからね。そんなところに近づいて、コロロちゃんに追いつかれでもしたら……」

「軽く死ねるな」

だから足止めか。いや待て、塗料缶？ そんなもの何に使う気だ？
「うげっ！ 何だこれ！」

後ろから、そんなコロロさんの声が聞こえてきた瞬間、チューブを捨てターボをかけた作者は一気に塗料コーナーまでの数十メートルを走り切った。バケツほどの缶を二つ取り、一つは手に、もう一つは僕の持ち続けているカゴに入れる。予備のつもりなんだろうが、さっきから結構の数の商品がカゴから飛び出してしまっているから、肝心な時に役立つかは五分五分といったところだ。まあ、あれだけ跳んだり跳ねたりしていれば仕方ないんだけど。

「あとは……」

辺りを見回す作者の顔が不意に有らぬ方向へ向いた。殴られた、それも下から。僕は懷中電灯を切ったままだったし、作者に至ってはとうに紛失してしまっている。辺りがよく見えないせいで、接近に気づけなかったようだ。今までずっと足音を頼りにしていたのだが、今回それも聞こえなかった。見れば靴を履いていない。

殴り合いにおいて靴の有無は割と重要に思えるのだが、それを捨てても接近戦に持ち込んだカラリさんの行動に驚きだ。【珊瑚】があれば近づく必要はないはず、わざわざ危険を犯してまで殴りにくるほど、彼女はあの往生際の悪い作者に復讐心を抱いているようには思えなかったのだけだ。

けど、その理由はすぐに明らかになった。

馬乗りになり、両手を足で踏みつけられて抵抗できない作者の顔をしこたま殴りつけたカラリさんは、その首に紐のようなモノをかけた。

「いいぞコロロ！」

掛け声に反応して、バチンッと光が散って見えた方にコロロさんの姿を確認。すぐ上の蛍光灯がチカチカ点灯していて、何とか詳細が分かる。

粘着トラップにブレザーとシャツを奪われてか、上半身は下着姿で、ブラジャーの色は黒だった。「何見てんだよ！」その手にはどでかいコイルらしき物体があつて……あれ、まさか即席の電磁石か？　ということは何か、強磁性を持つ物質を引き寄せる気だが、そんなものはそう多くない。鉄、おそらくは鉄性の陳列棚だ。作者の首にかけられた灰色の紐が、天井から垂れ下がっている吊り展示用の鎖に通され、その上で一つのラックに結びつけてあるのを見つけて、その狙いが読めた。

助けるべきか、一瞬の逡巡の間にカラリさんからの拘束を解かれた彼女は、一気に引きずられ始めた。

ゴンッ、ガンガンガキッ、ガギギ、キキキィー、ガガッ！

轟音、騒音、陳列物の大混乱。ある棚は倒れ、他の棚をも巻き込

んで離れ位置にいるコロロさんの元へと向かっていく。それに合わせて括りつけた紐も引かれ、作者の足は床を離れた。

一気に吊り上げられつつも、何とか絞まる首輪に指を滑り込ませた作者は、死を免れてもがくが、五十センチも床から離れた空中では大した効果を得られない。

そこに、カラリさんが駆けて出した。

手に握るのは自分の能力で作った処刑鎌。デスサイズ どうやら能力者のデフ

オルトラしい高い身体能力で跳躍し、死に損ないの首を刈り取った。ゴロン、ゴロゴロゴロ。鈍い音を立てて僕の方に転がってきたのは姫カットの髪型をした頭部。

信じられるか？ あれ、準ヒロインの生首なんだぜ？

その首を追いかけて、同じく床に落ちた首なしの胴体がこっちに向かって走ってくる。

……信じられるかい？ あれ、準ヒロインなんだぜ？

頭を首をつけ直し、さらに鎌を振るってくるカラリさんの斬撃をかわす作者だが、はっきり言って、その姿はお世辞にも格好いいものではない。強化された動体視力で反応できてはいるものの、大げさな避け方をして隙を作り、そこに追撃を食らってはどこかしらを切りつけられている。横に避けては足を斬られ、後退しようとすれば足の反応が遅れて手を斬られ、大振りの一撃に後ろに跳べば立ち上がるまでの隙に背中を斬られ。

心底、呆れる戦いっぷりだ。漫画としてもラノベとしてもあり得ないような情けのない戦闘描写。

さらには、電磁力で鉄ラックやその他諸々を自分に引き寄せるという、捨て身作戦から生還してきたコロロさんも加わって、形勢は完全に向こうに傾いた。

そりゃもう殴られるわ殴られるわ。格闘ゲームの羽目技、あんな感じ。

一際強く殴られて、閉店前の面影もなく色んな残骸の転がる床にどちゃっと倒れたただの動物的に、コロロさんが手をかざした。

今度は感電死させる気か。そう、もはや作者の死については慣れた僕が、助けもせずに薄情なことを思っていた時だった。

視界の端に、倒れる作者の近くにいつぞやのプロパンガスボンベが映った。

「っ！！　コロロさんマズっ」

チュンツ、そんな音をさせて紫電がボンベの表面を跳ね返った瞬間、火炎の花が咲いた。

——思考が本当に真っ白になるという事態を初めて経験した。瞬間的に光った光の色が、赤だったのか白だったのか、それすら判断がつかないような動揺。呼吸が止まって、肺に空気を取り込んだまま吐き出せず、苦しさにも顔もひきつる。心臓が鼓動のリズムを崩して胸も痛い。

思わず体を伏せて身構えた僕は、ぶわっと滲み出た汗が、ポタポタ落ちる床を見開いた目に映して、自分がまだ生きていることを認識した。

鏡に写っている自分の背後にいる怨霊を、わざわざ肉眼で確認するために振り向くような思いで顔を上げると、店内はまだ確かに店内と呼べる状況で存在していた。

どうやら爆発は免れたらしい。

けれど、全てが無事というわけでもないのも事実で、ボンベはガスの出入り口があるだろうバルブ付近から火柱を噴いていた。

……ボンベは元々二本あった。一本は引火、網一本は破損してガスをそこら辺にまき散らしているはずだ。プロパンは空気より重い。つまり低い位置に溜まるのだ。それがさっきの電磁石による物の移動で攪拌され、他にも破損しているだろう塗料などのガス缶のことも考えると、状況は爆発の秒読みをしているのと変わらない。

引火したら一貫の終わり。

コロロさんもカラリさんも、その辺の危険は分かっていたようで、

目を閉じたり顔を庇ったりとそれぞれ身構えていたのが、一番最初に顔を上げた僕には視認することができた。

だが、一人、足りない。作者だ。あの危険人物がいない！

「やだなあ、コロロちゃん、カラリちゃん、親衝ちゃん」

が、僕が慌てて辺りを見渡すよりも前に、彼女の声がすぐ近くでした。

振り向けば、すぐ横に彼女は立っていて、手にカゴから取り出したのだらうペンキ缶を持っている。

あの……爆発を連想させる火炎の中、一人目も閉じることなく倒れた場所からここまで移動してきたらしい。

「プロパンボンベがそう簡単に爆発するわけないでしょ？ 家庭にも設置するようなボンベだよ？ 安全対策はちゃんと取られているに決まってるじゃないか。そうそう簡単に爆発してくれないよ」

その台詞を聞いた瞬間、僕は躊躇いなく「コロロさんとカラリさん《ヒロインたち》を見捨てて、がむしゃらに出口に向かって、死ぬ気で走り出した。

空気中のガス、火を噴くボンベ、作者の持つ可燃性の塗料。

もう何の説明もいるまい。

何が「まだ手はある」だ！ やっぱロクでもねえじゃねーかつ！

「さあーて、いいですかあ！ おじーちゃん、おばーちゃん、おと

ーさん、おかーさん、それからおにーちゃんにおねーちゃんも！

ご家庭のプロパンボンベに、火が引火した場合の注意事項っ！」

背中越しに死神の声が聞こえてくるが、あの死への誘いを聞いてはいけない！

出入り口。コロロさん達が進入した際、半分開けられたままのシヤッターを潜り抜ける。

息切れが激しく、思わず息を変な感じに呑み込んでえずくのも構わずに駐車場を通過。

せめて、駐車場は抜けきらないと安全を確保できるとは思えない！
「火柱が上がったとしても、落ち着いて自然鎮火を待ちましょう！

慌てて水とかかけたりしてえ、ボンベを急速に冷やしちゃうとホントに爆発しちゃうからねええええええっ！！」

その台詞と共に発生した、大地揺るがすような轟音は、最初の轟き以降聞こえなかった。小説において、その規模を『ドガガガン！』とでも擬音で表すべきなのだろうが、僕の耳が逝かれた時点で表現どころの話ではない。

空気振るわす衝撃に吹き飛ばされて、アスファルトを肌を削られながら転がり、背中を作者の無免許運転の餌食になった廃車に打ちつけて止まる。痛みを堪えてホームセンターへ目を向けると、屋根の一部が火炎を纏って空中を舞っているのが見えた。

黒い煙が暗闇でも目立つほど黙々と上がり、シャッターごと吹き飛んで中の様子が見えるようになった店内は真っ赤に染まって轟々と燃え盛っていた。

凄惨すぎる破壊の様子を眺めて思う。

あの三人は。

あの三人は戦場をことごとく爆破しなければ気が済まないのだろうか。

第三話 一使い回しキャラの悲劇・後（後書き）

私、掛郡詩穂は命を狙われています。

なぜ、誰に、命を狙われているのかは分かりきっています。

ただひとつ判らない事は、この作品をどの賞に出せばいいかということです。

コロロとカラリが犯人の主犯格。

他にも犯人候補が1人。スクラップ車を所有。

理科室爆破殺人の被害者をもう一度よく調べてください。生きています。

作者の死は超能力者の能力によるもの。

証拠はありません。

どうしてこんなことになったのか、私にはわかりません。

これをあなたが読んだなら、その時、私は死んでいるでしょう。

……死体があるか、ないかの違いはあるでしょうが。

これを読んだ選考委員のあなた。どうかこの作品を選んでください。それだけが私の望みです。

掛郡詩穂

→おフザケMAX

後悔はしていない、反省点は多すぎる（笑）

打撃系が少なかったんですよ、今回は。

作者がほぼ全裸で行動している描写も変えるかも。エロくないしね！。

『○○文字○○行○○ページ』には応募する賞の規定数を嵌める予定。

一応今回は血や臓器、切断系の描写を極力少なくしてエグ味を抑えたつもりなのですが、場所をホームセンターに設定したせいで戦闘描写が長引いた……。

文字数がオーバーしたらまず削られるんだろうな。いや、そうでなくとも色々抑えないとまずい気がする。

まあ、マミれた（首ちょんぱ）だけで満足なんですけどね！

第四話 一使い捨てキャラの悲劇（前書き）

キナ臭くなってまいりました（笑）

第四話 一使い捨てキャラの悲劇

「―――続いて、ホームセンター爆破事件の続報です。灘川市『プライムプロ』でのガス爆発現場に、同日理科室で爆発事故のあった高等学校から盗まれた物と見られる車両が、廃車寸前の状態で止めてあるのが見つかったことが明らかになりました。このことから、警察は両事件に関係性があると見て捜査しています。理科室爆発事件の後から連絡がつかなくなっている生徒が数名いるとのことで、本当に死亡者はいなかったのか、徹底した爆発現場の搜索を含め、行方不明の生徒の足取りを追い―――」

テレビをつければ、どの放送局からも流れてくるのはそんなニュース。死傷者不明、犯人不明、しかし明らかに故意によるものであるホームセンターでの大爆発は、マスコミ格好の話題となっているようで……それらのニュースを見る度に、ビクビクしなければならぬのが本来の犯人の心境であり、僕の心境でもある。

あれから数日後、生き延びる、というよりはがつり死んで再生を果たした作者と共に、僕は市内のホテルに潜伏していた。

潜伏と言いつつ、取ったのはそれなりにグレードのいい部屋で、ビジネスホテルのような狭苦しさはない。バスルームも広く、壁の一面をまるまる使っている洗面所の鏡には全身が映って新鮮味がある。住み慣れた自宅とは違った家具を使うというのも乙なものだ。

そんな決して安くはないだろうホテルの、クーラーを利かせた部屋の中、ベッドに寝転がりながらのテレビ鑑賞など贅沢の極みだと思っただけど、テレビから流れてくる情報のせいで全く有り難みはなかった。

「大事になってるな……」

同日二つの爆発事件、負傷者を出した車両強盗。

それらの事件の犯人にまだ警察ははっきりとは至っていないが、行方不明生徒の中にいるとは当たりをつけているだろう。捜査の手

が伸びるのは時間の問題だ。

だけれど、何より大問題なのは、その『犯人』の中に当然僕も含まれていることである。

こうして作者と行動を共にしている以上、僕もまた事件後姿を消した怪しすぎる生徒の一人でなのだ。

現場に残してきてしまった廃車には僕らの指紋や頭髮が残っているし、ホームセンターでふくらはぎを負傷した時の血痕が残っている。

怪我はすでにほとんど治って、痛みも引いているのだけど、流した血が身体に戻る作者と違って、痕跡を残せばそのままの僕は怪我をすることすら許されない立場にあるのだ。

被害者面できればいいのだが、だったらさっさと警察に駆け込むべきだったわけで、『僕はやってません』という台詞が通用するとは思えない。

血については爆発で消し飛んでいることを祈るばかりだが、犯人の一味とされるだろうこの状況を打開する手立ては、どこに祈れば教えてもらえるのか。

僕が犯人でないことを証明できるモノは何もない。作者の供述？期待できると思ってるの？ 道連れにされるのがオチだ。

つまり現状、僕は逃亡犯と変わりない身なのだ。ニュースキャスターや専門家が事件について非難するコメントを聞く度に耳が痛い。だが、そんな僕と違って、主犯格であるはずの、良心を地獄にでも忘れてきたらしい作者はどこ吹く風。備え付けられているポットのお湯をティーバッグの入ったカップに注いでいる。

この野郎、人の気も知らないで。

「これ、大丈夫なのか？」

実は警察に捕まることまで気が回っていないのかもしれない。我が親に少しでも良心が残っていることを期待してそう尋ねると、

「ん、大丈夫大丈夫。ちゃんと警察に根回ししておいたから」

返ってきた言葉はある意味ではすごく頼りになる言葉だった。う

ん、まあ共犯扱いの僕としてはこれでいいんだけどさ。

「根回し？」

「うん、お金と脅しで。この世界の警察機関は腐ってるから」

……小説なのに夢も希望もないのか、この世界は。ん、待てよ？

これ、もしかしてラノベ一般に通じる法則か？ ラノベの登場人物が触法行為しても自由に動ける理由って、まさか。

うわあ……、知りたくなかった、そんなラノベ世界の裏事情。

いや、というかだ。

「そういうインモラルな話も含めて、ホームセンターのアレ、倫理的・道徳的にどうなんだよ。小説^{つくりもの}としても、ちよつと猟奇^{かげき}的過ぎたんじゃないか？ 斧やらチェーンソーやらガス爆発やら」

「んー、悪影響を与えるってやつ？ まあ言いたいことは分かるし、自分が子供持ったら同じこと言うんだろうけど、私イマイチそういう主張には懐疑的なんだよね」むう、と口を尖らして、彼女はティーバッグと同様に置いてあったお茶請けを口に咥えた。「話の軸はちよつとずれるけど、親衝ちゃんは殺人で一番多い動機って知ってる？」

「えっと、確か殺人のトップスリーは『憤怒』『怨恨』『痴情』だったかな？」

「そう、殺人の動機で最も多いのは『カッとしてやった』ってやつなんだよ。それこそ加減が分からずに殴ったりしてね」

自分の後頭部をチョップする彼女。

加減。その言葉に前にこの作者が言っていたことを思い出した。

突如沸いた激情を止めることは難しい。どれくらいの強さで殴ると危ないのか、どこを殴ると危ないのか、知っているというのは確かに大切だ。『喧嘩はするべきだ』というあの言葉は本気で言っていたらしい。

「殺人を起こすどうかに、物騒な思想を持っているかはあんまり関係ないんだよ。人を殺すという行為を忌避してようがいまいが、はっと気づいた時、目の間に死体が転がっているという状況は誰に

でも起き得る。殺人なんてとんでもないと、考えることすら嫌悪する人間の前にもだ。けれど、『どんな事情があろうとも人殺しはいけません』なんて常套句で思考を止めちゃうばかりで、実際起こした時のことを考えない人って多いよね。誰しもニュースで流れるバラバラ殺人の犯人を狂っていると評したり、思いもよらず殺してしまった死体を隠そうとして罪を重くする人間を愚かと思う。ただ結果たして本当に自分がその立場になった時、君なら警察を呼べる？

殺す気はなかったという、証明の難しい自分の心内を聞き入れてもらえると、本当に信じられる？ 下手すれば死刑や無期懲役、自分の人生がかかっているんだ。自我^{エゴ}ある人間として、逃げ道を探さないでいられるもののかな？ 殺人を思考することは罪にならないけど、傲慢は罪だよ。自分は犯さないと過信して、自分の人間性を疑わない人間ってむしろ怖いよね——まあさて、それで殺人を隠匿、死体を隠滅しようということになった際、君ならどうする？

どこか、自分と結びつかない場所に遺棄しようとするんじゃない？ けれど、一人一人を入れられる大きさのバッグなんてそうそう持っているものじゃない。分けて運ぶという発想は自然に出てくる。方法は言わずもがなだ。それを実際にやるかどうかはおいておいて、チェーンソーや鉈、ノコギリとバラバラ死体自体に快樂殺人に垣間見るような猟奇性は本来ないよ。必要に駆られた結果であって、快樂のために人体を損壊させる快樂殺人とは似て異なるものだ。手にした道具と行動が同じだったってだけ。……身を守るために自分の生活圏で武器を得ようとすれば、当然鉈や斧といった大工道具が思いつくし、それを調達する場所は限られる。ホームセンターやチェーンソーという単語だけで猟奇性をイメージするのはどうかと思うね」

ティーバッグの浸け過ぎで濃紅色にまで変色した紅茶を一気に飲み干して、さらにお湯を足しながら作者は再び口を開いた。

「そもそも快樂殺人や通り魔の大量殺人ってよく騒がれるけどさ、さっき言った動機という観点からすればかなり少数派^{マイナー}でしょ？ 特

異的なケースだから派手に扱われるけど、そういった事件の原因や防止を語るよりメジャーな動機を取り上げた方が合理的だと思うのは私だけかな？ 合理主義を追求すればいいってものにないんだろうけどさ。何にせよ、マスコミが殺人を防ぐことに真剣に取り組んでいるかっていうことには、私は首を傾げるね」

……確かに、倫理観と道徳観の抜け落ちたこの人間の言っていることは、あながち間違っていないのかもしれない。『悪影響を及ぼす』——これは、つまり裏を返せば、猟奇趣味を芽生えさせることが殺人的な思想を生むという考えからくるのだろうが、殺人の動機は毎年変わらず、大抵が普通の人間関係から生じている。災害と同じで、多くの人間が『自分は大丈夫』と真剣に考えはしないことではあるけれど、人を殺す可能性というのは誰にでもあり得る話だ。

喧嘩を知らない人間が加減を知らないから怖いように、殺人について忌避して考えもしないというのも怖い。本当に一時の激情より自制心が強いのなら、殺人の動機第一位が憤怒』であるわけがない。もし激情にかられた時、とっさに近くの灰皿を手にとった時、それを憎たらしい相手の後頭部に振りかざそうとした時、もしその手を止めるとすれば、それは抑制心ではなく、人を殺すということについて考えた末に出た、自分が人を殺めるという可能性に対してのあまりにも身近な恐怖だろう。

そういう意味で言えば、ただ面白がって、あるいは怖がって特異的な殺人事件を報道した結果、模倣事件を起こすような現状はあまりよろしくはないというのが、作者なりの真面目な意見なのかもしれない。

が、だ。

溜め息を吐いて、僕は得意げな顔をしている作者にじと目を送る。読者の皆様よ、騙されてはいけない。

コロロさん達の動機を思い出してほしい。初めは復讐を動機とした殺人だったのかもしれないが、作者が殺しても死なないと分かつ

た後もしつこく殺し続けている理由は『虐めて殺す』ことに他ならない。そのためにチェンソーを持ち出したり、串刺しにしたりとわざと惨たらしい殺し方をしていることから見ても、今回の一件は紛うことなき快樂殺人。

バラバラ死体単体では異常殺人とは言えないだとか、ノコギリは単なる道具として使われるにすぎないから猟奇性はないだとか、そんな作者の屁理屈など関係ない。

さっきの作者の話はただの議題のすり替えだ。

「ご高説どうもありがとうございます。で、『男ならスパツと手斧だよ』とか言ってた詩穂ちゃんに質問なんだけど、凶器持って『たのしーお遊戯の時間ですよ』なんてゲラゲラ笑うようなスプラッター☆コロ&カラリちゃんの大活躍と今の話、無関係だよな？」

「……………」

僕の指摘に、この詐欺師はバレたとばかりに顔を背けた。二番煎じでかなり薄くなった紅茶を、今度はズズズとわざとらしく音を鳴らして啜る。

それから、気まずい沈黙に耐えかねてか、彼女は言った。

「こういう時に便利な魔法の言葉を教えてあげよう」

「うん？」

「この物語はフィクションです。登場する人物、団体等は実際の名称とは関係……………」

「最ッ低だなあんた！」

「まあ、動機云々の話はいいや」彼女は『それは置いておいて』のジェスチャーをしてみせた。「今度は殺人行為自体について考えよう」

うわあ、不利だと悟った途端、露骨に話変えやがったぞこの屑。

「殺人は絶対駄目って言うけれど、君は自分の大切なモノ……この場合は人だけど、そんな、何があろうと絶対に失いたくないと思っている人が殺されるかもしれないとして、危害を加えようとする人間を生かしておける？」

「そんな極論卑怯だろ。『遭難しました。助けはきません。食料尽きました。仲間の遺体を食べますか?』っていうのと同じで、そんな極限的な状況を通常における常識で計るなんてナンセンスだ」

「でも極論を考えることは悪くないさ。本を読むことも、思考することも経験の一つだ。経験は人生を豊かにする、らしいよ? ……

ただならない動機でもって愛する人を奪おうとする人物。たぶん多くの人は言葉で説得を試みるとでも言うんだろうけどさ、例えばその難行を成し遂げたとしても、自分がちゃんと説得できたと、相手がしっかり納得してくれたと——信じられるものかな? いつ心変わりするかも分からない。その人物が生きている限り、真の意味で脅威は去ってはいない。それでも、本当の本当に、殺さずにいられる? 綺麗事を言う人間は多い。けれど、綺麗事が汚れずに在るのは実現できないから、実体がないからだよ。私は殺人を完全に否定することはできないし、殺人を深く考えずに否定する人間を信じられない」

両手を添えたカップを膝元において、口元に笑みを浮かべながらそんなことを言った作者の目は笑っていないかった。

……こいつの話の内容はともかく、分かったことが一つある。

『本当に信じられる?』『自分は犯さないと過信して、自分の人間性を疑わない人間ってむしろ怖いよね』『説得できたと信じられる?』『納得してくれたと信じられる?』。

何て事はない。多様な言葉で惑わされそうになるが、要するに、この性根の腐った屑こそが……、

「何が『信じられる?』だ。単純にあんた自身が自分も他人も信じられないだけだろ」

「うん、そうかもね」

僕が吐き捨てるように言った指摘を、彼女はこともなげに肯定した。

「さて、今日のラノベ的掛け合い（シリアス・ver）はこの辺にしておこう。目下問題なのはこの世界の^{ものがたり}猟奇的表現についてではな

くて、コロロちゃんとカラリちゃんだ。正直言って、今のままじゃまたなぶり殺されるだろうし」

「ホームセンターの自爆だって、結局自分も死んでるから一矢報いたかと言われれば微妙だったしな」

「うっ！　そうは言うけどね、あれが私の限度だよ。拳銃もなければ、攻撃性のある能力を持っているわけでもない。素手でも武器でも分が悪いんだから、ああいった小細工や奇策で対抗するしかないけど、まあ次も同じ手段というわけにもいかないのが、辛いところなんだよねえ」

「同じ手を食うほど向こうも甘くはないって？」

「いや、超能力モノ……という設定はもう今更感があるけど、バトルモノとして戦闘シーンを二番煎じにするのはどうかと……」

「そりゃまた……難儀な話だよな」

自分が狙われている立場でありながら、物語としての体裁を気にして戦わなければならないなんて。ぶっちゃけ、この物語の筋書きはすでに修復できる域を越えていると思うのだけど、これは言わないでおいてやろう。

その方が面白いし、諦めない心が大切って言うし。いやいや、作者には全力で足掻いて先輩方の気を引いておいてもらわないと困るとか、そういう思惑は一切ない。そう、全くないのだ。

「せめてこっちに発火能力や念力なんかがあったらもう少し楽だったんだろうけどね。こっちは【落ち葉】と、役に立たない主人公の、それもほとんど覚醒もしていない【鯢】だけとは」

「役に立たなくて悪かったな。というかだ、そもそもその【鯢】がどんな能力なのかまだ知らないし。だいたい何だよ、何でよりもよって両生類なんだよ。もっとこう……格好いいのなかったのか？」

「いいじゃんサンショウウオ！　カワイーじゃん！　それに君の能力はそれじゃないと駄目なんだよ」

そう言われてもな……。

「わけ分からん。……で、結局【鯢】の中身は？」

「ちょっとは自分で調べなさい」

そりゃごもつとも。調べもしないで、ただ答えを聞こうとするなんて行為は誉められたものではないけれど。

けれどしかしだ。反論させてもらえれば、【鰻】≡電撃、【珊瑚】

≡石灰質、【落ち葉】≡不死身という前例をみるに、能力名とその内容の間に規則性は見られない。【珊瑚】が石灰質を作り出すからというのはまだいいのだけれど、電気を出せるのは鰻の極一部の種類だけで、【鰻】という名称はあまりに抽象的過ぎる。【落ち葉】

に至ってはイメージに反する不死性が能力の効果だ。枯れ葉が土に還り、やがて肥料となって樹に還っていく……というサイクルから、生き返りに関しては辛うじてこじつけることはできるけれど、作者の再生は『生まれ変わる』というよりは『元に戻る』というのが正しい。こういったことから、【鯢】という言葉だけでどんな能力か当たりをつけるのは至難の業と言っている。

ま、元々戦闘に参加するつもりがないのだから、真剣に考える必要もないか。覚醒のきっかけが臨死体験である時点で、自己防衛のために能力を求めるのはナンセンスなわけだし。

ただ、

「思い返すと自分でも呆れるくらい主人公らしくない主人公だな僕……」

「臨死体験で覚醒があるじゃん」

「『ピンチの時に覚醒する』ならともかく、『ピンチで仮死状態になって覚醒する』じゃあなあ。能力共々、もう少し物語の主役！

って感じのは思いつかなかったわけ？ 主人公のお約束って他にもあっただろ？」

「『無意味にモテる』とか？」

「いや、それは要らないわ」

この世界のヒロイン達ってあんたらじゃねえか。何の罰ゲームだよ。
ものがたり

「じゃあ『寝坊して事件に巻き込まれる』」

「僕の記憶だと、自称作者の痛い少女がやってきた時から厄介事に巻き込まれてる気がするんだが？」

「『順応性が高い』」

「うん、僕の順応性が高くてよかったなインベーター」

「『自分には特別な力があって、いつか自分の才能が認められる事件が起きると信じている』」

「それは何か違う」

「いや、特別な力自体は実際に眠ってるわけだからあながち間違っ
てはないでしょ」

例えそうだとしても、そんな痛い設定は御免だ。

「だいたい、何で臨死体験で覚醒なんて面倒なことにしたんだよ。」

コロロさん達はどうなんだ？　ちゃんと臨死体験したことになって
んの？」

「コロロちゃん、というかあの電波娘なんかは別に死にかけて覚醒
したわけじゃないよ。単に君の場合はそうであるだけで」

「えっ！？　何ソレずるくない？　てっきり僕は臨死体験の中で、

三途の川の向こう岸から『あなたの能力は〇〇です』なんてお告げ
があるものだ……」

「何なのさ、そのへボイイメージは。親衝ちゃんさあ、少しは考え
てみてよ。コロロちゃん達は元々別の世界のキャラクターで、今回
は電波ちゃんと珊瑚ちゃんに乗り移った形なわけなんだから、臨死
体験での記憶が能力覚醒に関わってくるとしたら、二人は超能力を
使えないことになるだろう？　生まれ変わったわけじゃなくて、超
能力者としてできあがったキャラに憑依しているわけなんだから」

「あ、そっか。臨死体験の記憶があったとしても引き継げないのか」
「そ、臨死体験はあくまで君限定のオマケ。主人公特典。まー、元
の人格の記憶を引き継げない弊害で、あの二人が自分の能力を使い
こなせてないっていうのは、不幸中の幸いだったけど」

「今さらりと怖いこと言ったよな。あれで使いこなせてない？　そ
の割には殺されまくってたじゃねーかよ」

「もし【鰻】を最大限活用されてたらもつと一方的だったよ。あの子はホントに準ヒロインの中でもキーウーマンだから……。そういえば、貸してあげた『作者の視点』、君もアレを使いこなせてないよね。ただ主要登場人物と脇役を見分ける目だと思ってるでしょ？」

「えっ、違うの？」

「作者の視点だよ？ 他にも使い方ってものがあるのさ。見つけてごらん。……と、そうだ。今日って四月の何日？」

「え？ ニュースにテロップで出てたろ？ 二十四日だよ」

「ふうーん、そっか。……ねえ、ちょっと買い出しに行ってきたよ」

「買い出し？ 何で僕が。いや、というか僕らってお尋ね者だし、まずくないか？」

「それを言ったらホテルに堂々と泊まってる時点でアウトだし、さつき根回ししたっていったでしょ？ 晴れて外出が解禁になったわけだし、ついでに気晴らしでもしてきたら？ 私は対策練らなきゃいけないし、もうちょつと籠もるつもりだけど、つき合っても面白くないと思うよ？」

「あーうん、じゃあ僕は出てよかったな」

広い部屋とはいえ、ずっと屋内に籠もりつきりで気が滅入っているし、それに―――備え付けのメモ帳に買い出しの目録を書き込んでいる彼女の様子をちらりと見る。……それにこいつのいないところで、じっくり考えたいこともある。今後の身の振りようについて、作者から逃げるという結論を得た場合にもその方が都合がいいだろう。

この人間不信のことだ、僕から別行動を言い出せば怪しむに決まっている。向こうから提案してくれたのは有り難い。

「じゃあこれ」

渡されたメモを確認すると、筆頭に『たこわさび』『塩海苔』『レトルトご飯』と書き殴られていた。このラインナップから察するにたこわさ茶漬けが食べたいらしい。分かりやすいというか何というか……だいたいこの子供舌野郎、わさび駄目じゃなかったのか？

まあいい。

他にも小物が幾つか指定されているが、たこわさび以外は売っている場所の見当はつく。たこわさがそこら辺に売っているものなのかが問題だが、なくとも構いはしないし、帰りが遅くなった際の言い訳に利用できる。

一応警察には近づくなという注意を背中に受け、僕はホテルの一室を後にした。

1

ホテルで寝泊まりし、ホテルのレストランで食事をし……そうやって過ごしてきた数日の間、自然光を直接受けることがなかった身体にとって、空から注ぐ太陽の光はなかなか刺激的だ。

運動をあまり行えなかった閉鎖的環境にただけに、歩くというだけでも心地よく、作者という、その創作物である僕としては神に等しい存在が近くにいることで感じていた息苦しさからの解放感形容詞難しいものがある。

そう、この感覚はあくまで健康を求めた身体が喜んでいるからなのだ。犯罪者がお天道様の下を堂々と歩けるようになった解放感ではないのだと主張したい。

スーパ―に寄って次の目的地へと歩を進める途中、歩道橋の上から道行く人々を眺める。地元のホテルなのだから、外に広がる町並みは当然見知ったものであるはずなのに、現在の自分の立場から見る世界は馴染んだモノとは違って見えた。

「この世のモノ全てが作者の創り物、か」

オフィスビルに百貨店の建物、テナント募集の広告に、進学塾の看板。真下を通る車、歩道の人波、市バスの車窓の奥に覗く学生の横顔に、子供の手を引く母親。

作者の理想と想像に依存して組み立てられたジオラマ、作者の思い通りに動く社会、作者の物語のために役を演じる人々。

それを知っているだけで見え方は変わってくるというのに、さらに作者の眼を通して見れば、この世界の景色は激変する。

顔のない人々。この舞台を埋め尽くす、群衆という名の背景。

それを知ってから、レストランで食事をオーダーする時も、レジで会計を済ませる時も、会話の相手全てがマネキンに見えるようになってしまった。

挙げ句、この眼にはまだ別の効果があるという。

試しにこうして使ってみても、何も気がついたことはないが、本来の持ち主が言ったのだからそうなのだろう。

「犯人の気持ちになって」が警察や探偵の鉄則だ。今後の身の振り方を考えるために、それに則って、あの自分とは全く行動原理が異なる気味の悪い人間について考えてみると、いくつか不可解な点に思い至る。

作者としてはこの世界は公募用の作品であり、失敗の許されない舞台だ。なのに、主人公である僕に行動を強いられないというのはおかしい。主人公を軽んじているのは前から知っているが、先の戦闘において戦いもしないような僕をそのままにして、あまつさえ二、三度助ける真似までしたのは理解できない。僕の覚醒は死にかけることだと作者自身がそう言ったのである。助けるメリットなど本当はない。

僕自ら主人公としての行動を行わせるためのご機嫌取りの可能性はあるけれど、あまりに不確実な投資と言わざるを得ない。

何を考えているのか、本当によく分からない。

今だってそうだ。別行動を許すなんて、僕がそのままエスケープする可能性を考えつかないわけがないのだ。

ガサゴソとビニール袋を探ってペットボトルを取り出した。一応たこわさびも袋の中に入っている。

帰ってこれを渡せば、とりあえずは現状維持はできる。

が、逃げるというのも選択肢としては悪くない手だとも思う。

あいつは自分が潜伏に徹すれば、コロロさん達はおびき寄せるた

めに主要キャラを殺していくだろうと言った。現在はコロロさん達を何とかしようと画策しているようだが、僕が逃げればその限りではないと、暗に脅しているわけだ。だが、最後ほとんど自棄を起こしてホームセンターを崩壊させた様子を鑑みるに、作者の近くにいたとしても必ずしも安全でもないし、僕が逃げきれるという可能性もある。

その場合問題となってくるのは、姉と真正ヒロインの存在だ。さすがにあの二人を巻き込みたくはない。逃亡を図るなら、その点をクリアできる見通しが立ってからということになるが、さてどうしたものか。

空腹感を感じて時計を確認すると、ちょうどお昼時だった。

久しぶりに行き着けの定食屋で食事を取ろう。落ち着ける場所とこののはいい。座って、食べて、考えて、そうすれば少しはまともな案を思いつけるだろう。

そんな、危機管理ができているようで結局は楽観的な考えの元、僕は歩道橋を去った。

————『行き着け』なんて言葉が、キャラクターの行動心理を説明づけるために、作者よって作られた都合のいい設定であるなんて、この時はまだ思い至りもしないまま。

2

「んー、んん？」

注文した料理がくるまでの暇つぶしがてら、作者の目を発動させている最中のこと。

それなりに人気のある定食屋で、幸運にも窓際の席を取れた僕は、ガラス越しに外の景色を見ていた。魔眼と言っているのか、非常に微妙な眼を通して見る世界は、顔のない人が流れていく相変わらず色のない世界で、居たたまれず視線を外そうと、空へ目をやって…

……そうして、ソレを見つけた。

数字だ……。

空に数字表示されているのだ。

デジタル数字で六桁の数字が、青天井の真ん中にどでかく掲げられて、刻一刻とその数字を減らしている。

「何だあれ」

アレが、作者の視点の別の使い道なのだろうか？

一瞬タイマーかと思ったのだが、『…』がないし、そもそも数字の減る速度が一定ではない。いきなり十の位を減らしたかと思えば、不意に止まったりしている。

何なんだ一体。

気味が悪くなって、顔を正面に戻す。と、ちょうどその時、顔なしの店員が僕の頼んだオムカツを運んできているところだった。

皿を受け取りスプーンを手に、さあ食べようとお皿に目をやると、今度はそこにも数字が現れた。

次の数字は一桁で『4』が淡い緑色に輝きながらぷよぷよと浮かんでいる。

しかし、この数字の方は一向に減る気配を見せなかった。

能力もそうだったが………法則性がよく分からない。

全く、こんなことを気にするなんて馬鹿馬鹿しすぎる。

ちよつと気になったから調べてみたにすぎないのだし、機能が分からなくてもどうってことはない。脇役が顔なしになるのと同様、あくまで作者にとって便利な目であって登場人物キャラクターの僕には大した利便性があるわけじゃないんだから。

オムレツの端をスプーンで切り取って口に運ぶ。広がる卵の甘みとトマトライスの酸味に幸福感を感じて、手が本格的に動き始めた。

……やっぱり食べるのなら、ホテルのレストランよりも飲食店の方がいい。慣れ親しんだ食べ物の方が消化にいい気がするし、何より久しぶりの一人での食事だ。リラックスできるというのは有り難かった。

が、残念ながらそうしていただける時間はオムレツとカツ揚げをそれぞれ半分ほど食べるまでだった。

「すみません」とかけられた声に顔を上げると、店員が後ろにお客をつれて立っていた。

この定食屋は人気もあり、今はお昼の時間帯だ。自分自身も常連だし、こういうことは前にもあった。

相席の依頼だとすぐに察して、店員の言葉が続く前に頷いて了承の意を伝える。

「ありがとうございます」

頭を下げて店員が去った後、隠れていた相席相手の姿が見えて、この時やっとな僕は自分がしでかしたことの重大さを知ることになった。

相手は女の子だった。ちょうど僕と同じぐらいの年頃の、女の子。全体的に短く切られた藍色の髪は、もみあげの部分だけが長く、蔓のようにするすると伸びている。

日本人よりも透き通った肌をしていて、整った顔立ちの内、長いまつげが印象的で――――そうつまり……顔がある。

作者の眼はそのままだ。現に辺りの客の顔は今も見えていない。であるのに、僕の正面に座った人物にはキャラクターとして個性という物が付加されている。

一瞬、準ヒロインかとも考えたが、作者が言った『準ヒロインは四人』という言葉を思い出してその可能性を否定する。ヒロイン殺しで二人の準ヒロインは死亡、残りの二人はコロロさん達であるはずで、無理矢理ねじ込んできた作者が番外の五番目ヒロインであることを例外として除けば、準ヒロインはもう存在しないはずだ。

別の役割を持った登場人物か？

けど、これは少し考えにくい。ここはラノベの世界だ。主人公と年の近い異性を出すのなら、作者としては当然カップリングを意識してキャラクターをデザインするはず。

そうでなければ主人公の男友達の彼女ということになるが、クラ

スマートに顔のある人物がいなのは確認済みで、超能力バトルモノとして適当なライバル役に思い当たる節もない。

後はあるとすれば……他の作品のヒロイン、とか。

「現代社会を背景にした物語同士は地続きである」とは作者の言だ。はあ……つまりは彼女もまた、あの作者の被害者ということか。

しかし、彼女にとつての主人公が誰かは知らないが、その彼は幸せものだろう。

彼女はかなりの美人さんだし、中身におかしな人格がインストールされてはなさそうだし、……彼本人はその出会いや自分達の好意が作者の操作によるものだとは知らない。

この娘の方が僕の好みのタイプなだけに、正直に羨ましいと思う。いや、作者の一押しする坂本実歩ちゃんも可愛いと思うのだけど、僕はどちらかというと明るい子より大人しい子の方が好きなのだ。

席に座った彼女はお冷やを持ってきた店員に、メニューを見ず「レモンティー」と注文を口にした。

手に提げた大きめのボストンバッグを椅子の下において、ちらりと壁に掛かっているTVを一瞥する。ニュースが流れていて興味をなくしてか、正面に向き直した彼女は像のように固まってしまった。気まずい。というかさつきから彼女を観察するあまりオムカツに手を伸ばしていないことに気がついた。

言い訳するように数口かき込む。

それが気管支に入り込んでむせてしまい、かえって挙動不審になってしまったが、その無様な姿は届いた注文品に意識がいていた彼女にはバレなかったようだ。

コトリとテーブルに置かれたティーカップに彼女は手を着けずに、感情の読み取り難い瞳を湯気に向けている。

その様に無意識に見入ってしまったいた自分もまた、手を動かすのを忘れていて、テーブルに再び気まずい沈黙が降りてきてしまった。

何やってんだか、僕は。作者への対応を考えにきたはずなのに。

沈黙も息苦しいけれど、この手の娘は話しかけられるのは嫌うんだろうな。

そう思っていた時だった。

「――この事件を起こした人はどう思っているんでしょうか……」

唐突に、ポツリと彼女が呟いた。

「え？」

その言葉に反応して思わず声を出してしまってから、彼女の台詞が僕に向けたものではなく、単なる独り言だったのだと気づく。

けれど、声を出した後ではもう遅く、視線を僕に向けた彼女とばっちり目が合ってしまった。

「……………」

お互い、もはや気まずいとも言ってられない、居たたまれない沈黙の中でしばし見つめ合う羽目になり、最終的に視線を外したのは彼女の方で、再びテレビへと向いたその口が、今度は僕に向けての言葉を発する。

「人が……いっぱい死ぬかもしれない、そう………思わなかったんでしょうか？」

言われてテレビに意識を傾けると、流れているニュースはやはりどうか何というか、ホームセンターの一件だった。

それに少なからず関わっている僕としては、これまた居たたまれない話題である。

「何であんなことをしたんでしょうか？ 目的があったのでしょうか？ ……確信犯的な行動だったのでしょうか？」

確信犯的。この場合は当然正しい方の意味で、『自身の行為が正しく、社会が間違っていると信じての犯行』ということだろうが、実際その犯行現場を目撃していた僕からすれば、あれはガキのイタズラに近い代物だったというのが感想だ。

彼女が何を求めてそんな疑問を口に出しているのかはよく分からないが、これだけは言える。

「あんなことをする奴に思想だとか信念だとか、そんな上等なモノは存在してないよ」

「……何であんなことを。爆薬と違って、威力も規模も計れない。もしかしたら付近の住宅を巻き込んでいたかもしれない。……………良心は痛まないのでしょうか？」

ま、そうだよな。ガス爆発だ。充満していたのは店内だけだったとしても、その威力はTNT火薬を使った爆薬のように計算できるものではない。

被害者が出る可能性は否定できなかったし、実際僕自身が巻き込まれそうになった。

そういった被害の可能性を無視して、その場のノリとトチ狂った思考であんな自爆をやったのけたのだ。

あんな奴に良心なんてあつてたまるか。

「良心なんてある奴はそもそも爆発なんて起こさないだろ」

吐き捨てるように言って、それから今朝のアレとの会話を思い出して言い加える。

「暴力自体は、まあ……喧嘩の範囲に収まるんらって思うし、良心があるうとなかろうとカッとなって人を殺しちゃうことだってあるだろうし。でも、爆破は違うよな。事前に準備してるんだから激情でってわけでもないし、いくら威力を抑えようが自分の腕で殴るのとは違って、どんな怪我をするか分かったものじゃない。相手に後遺症を残すほどの傷を与えるようなモノは喧嘩とも言えない」

作者やコロロさん達があんな過激プレイをやっても親子『喧嘩』で済んでるのは、単純に不死身という前提があつてのことだ。

もし爆破行為を何の変哲もない一般人にやろうとする人物がいるとするならば、そいつに良心があるとは思えない。わきやく

例外であるあの親子だって良心なんて大層なモノは持ち合わせていない。

「だから、爆発なんて手段を取ろうとする人間に良心なんてないんじゃないか？」

言った後になって、自分が初対面の人間に対して長々と恥ずかしい持論を述べていたと気がついた。

うわあ、やっちゃった。

しばらくの間、恥ずかし気もなく自説を語る自己主張の激しい作者と生活したせいだ……。そうに違いない。

今すぐ顔を覆ってうずくまりたい衝動に刈られている僕に反し、彼女は表情を特に変えることもなく、「……………そうですね」と相槌を打った。「良心があればやらない、ですよね」

「まあ、僕はそう思うけど……………」

彼女の視線はもう一度液晶の画面に注がれる。

ニュースで流れているのは何度も繰り返されたVTRだ。

身を覚えのある学校の廊下と理科室の惨状、それとホームセンタ一の映像を繋ぎ合わせるナレーションの声に、数人の行方不明者を知らせるテロップ。

僕のした話では、その不明者の中に良心のない人物が混じっていることになる。無論、自分もその候補の一人なのだ。

もう現状だけでどう收拾をつければいいのか分からない状態だ。考えてみれば、物語を外側から変えられるからこそ作者は世間体も権力も無視して派手に動けるが、内側の人間である僕は奴から逃げる、警察や学校に自分の力で対応しなくてはならなくなる。

ああくそっ、逃げるというのもかなりのリスクを負うことになりそう。

何も爆破行為に限らず、どうなるか考えずに行動した結果、致命的な事態を招くことがある。

流されるまま作者についていったことがまさにソレだ。あの選択は疑う余地もなく誤りだった。

「何事にも取り返しのないことってあるよな……………」

思わず呟いた言葉に、今度はさっきとは反対に彼女がビクツと反応した。

湯気の消えたレモンティーを初めて口に含んで、しばし瞳をさま

よわせる。

ボソボソと二言三言呟いた彼女は不意に伏せていた顔を上げた。

「あのっ、小林さんは取り返しのこと、やってしまったことってありますかっ!？」

今までの小声からトーンを倍ほど上げた音量にびっくりした僕は、呆気にとられて目を瞬かせた。

何やら——僕と言った言葉が彼女の琴線に触れたらしい。

別の世界とはいえ物語の登場人物だ。心内に抱えるモノがあってもおかしくない。

それが何なのかは僕には分からないが、藍色の髪をしたこの少女は、無表情に近かった顔を真剣なものに変えてこっちを見つめている。

「いや……そうだなあ」

今ニュースでやってる爆破に加担してしまったことがまさにそれなのだけれど、まさかそのことを言うわけにもいかない。一瞬の逡巡で得た結論は、ぼかして喋るというものだった。

「犯罪なんかは、それこそだろ。法を破れば一生傷が残る。負い目も負うけど、犯罪者というレッテルは拭えない。軽犯罪だってそうだし……重犯罪ならなおさらだ。その気がなくても、やってしまったら時間は戻りはしない。そういう失敗はあったよ。やっぱりまずかったよなあ……」

最後のは自分に向けての呟きなのだろう。

「まあ僕のはことはともかく、人の人生を台無しにするっていうのは何だって取り返しのことかないことだと思う」

例えばあの屑作者が僕を巻き込んだこととか。特にあのゴミ作者が僕を巻き込んだこととか。あえていうならあの人間失格作者が僕を巻き込んだこととか。

あいつがやってこなければ、僕は自分の人生において、取り返しのつかない事態になりかねない現状に置かれることはなかったし、車強盗や無免許運転幫助に不法侵入その他諸犯罪に荷担してしまう

ことはなかった。

もちろん、最初から突き放して無視しておけばよかったというのも分かっている。僕が流されるままに流されたのも『取り返しのつかないこと』の一つだ。

時間が非可逆的なものでない以上、一つの判断ミスで被った不利益を取り戻せないという状況は必ず出てくる。

「もし……もしも取り返しのつかないことをしてしまったら、どうすればいいんでしょうか？」

再び顔を伏せた彼女は、カップを両手で包み込んで胸元に持っていた。

ほとんど残っている紅茶の水面を、その波打つ様をじっと見つめる彼女。

その様子に僕はほとんど困ってしまった。

よく、分からないが、どうやら彼女は『取り返しのつかないこと』とやらをやってしまったキャラクターらしい。

で、そのことで悩んでいる時に、ちょうど自分が悩んでいる事柄に触れるワードを僕が呟いたものだから、彼女はこうして見知らぬはずの僕に答えを求めている。

だとすれば、彼女が僕に期待しているのは一般論としての解答だろうが、その内容が見えてこない僕としてはどう答えたものか分からない。

だからといって、僕が爆破騒動に荷担していることをぼかしたように、彼女だって具体的に、その『取り返しのつかない』内容については伏せておきたいに決まっている。

どう……答えたものか。

悩んで、口ごもる僕に彼女はいつそう身を縮めた。

「……………生きてていいんでしょうか？」

吐き出されたのは、思ってもみなかったあまりに重い台詞。

「いや、それはいいでしょ」

その言葉に、反射的にそう即答してしまった。

顔を上げた彼女と僕の視線がばっちりとあって、気まづいながらも、ここで目を離せば、今言った言葉に信憑性がなくなるととっさに判断して、曲がりかけた首を何とか正面に固定する。

可愛らしい顔が、大きな瞳が、自分をこれでもかというぐらいに捉えている。そのことにプレッシャーを感じながらどうにか言葉の続きを紡いだ。

「……僕は君が何を悩んでるのか、その重さも分からないけどさ。後悔も反省も、自責の念に押しつぶされる手前まででいいんじゃないかな。死ぬほど悩んで本当に死んじゃったら、後悔や反省の意味がなくなるし、失敗はこれから生かせないと意味がない」

「でも、時に法は死刑をもって罪を償わせるでしょう？」

叱られた子供が言い訳を口にするように、彼女の返してきたのは自分を責める言葉だった。

……そんなモノを、作者はこの娘に背負わせたのか。

詳細はともかく、彼女の言う取り返しのない罪とやらの重さを知らされて、僕は「それは君の罪じゃない。作者が造ったモノなんだ」と言ってやりたい衝動に駆られた。

が、そうするわけにもいかないことは重々承知している。自分の思いを言い表す言い回しも思いつかず、言葉足らずの台詞を重ねるしかなかった。

「法はあくまで治安維持のためのシステムだよ。倫理的・道徳的な罪とは切り離して考えるべきだ。君の『生きてていいんでしょ？』って問いは、過ちを犯した代償を受けるべきだと思ってるの発言だろ？」

「……でも、世の中には死んだ方がいい人はいます」
確かに、そうなのかもしれない。

聖人でもない代わりに偽善者でもない僕は、『人類皆平等』だとは思っていない。綺麗事が賛美されもてはやされる一方で、誰もが見たくない汚い現実を放置することが僕には怖い。

だから、彼女のその言葉を否定することはできなかった。

それを心の底から否定できて、「どんな凶悪な犯罪者にでもやり直すチャンスはあるべきだ」とでも嘘偽りなく口から吐き出すことができれば、彼女を少しは救えるかもしれないと分かっているのに、自分の主義に正直であろうとすればするほど、『君は生きててもいいんだよ』、そんなたった一言の本音^{メッセージ}を伝えることができない。「やってはいけないことというのはあるんです。それを犯した人は、生きていくべきではないんですよ」

あまりに真摯な瞳で彼女は言う。

それに応えるのに、僕の言葉は遠回り過ぎる。

「……だとしてもさ、その『生きていてはいけない』って誰が決めるんだ？ 例えば僕や君がさっきのニュースの犯人なんて、良心もなく反省も期待できない救いようのない人間だから死んだ方がいいって思ったとしても、そんな考え自体が人の命を蔑ろにしていることになる。自分が正論を述べていると思いがり、他人の命のことを勝手に決めつけてとやかく言うのも罪深い。生きる権利があるかないかなんて話は堂々巡りして答えなんか出ないんだよ。人は誰だってミスをするんだからさ、結局僕は繰り返さないってことが大切なんだと思うんだ。……その、口下手でうまく言えないけど……」用意できた台詞などこんなもので、自分でも分かるお粗末さに心臓が痛い。

普段使わない脳味噌をフル回転させた結果、頭が熱されて思考までぼやけ始めた。

そんな僕に視線を固定していた彼女は、ゆっくりと目線を降ろして両手の中のカップを見つめ、不意に顔を上げた。

「……………ありがとう」

そこにあったのは笑顔。

表情の乏しかった彼女の思いがけない言葉と笑みに息を呑む。

「どう………いたしまして」

辛うじてそう返すことしかできず、それだけで一杯一杯な僕と対照的に、元気を取り戻した彼女は残ったレモンティーをそのままに、

カップをテーブルに置き、ボストンバッグを抱えて店から駆け出していった。

その様を、ただただ見送ることしかできずにいた僕は、彼女の姿が建物の陰に隠れたところでやっと緊張感から解放される。

それと同時に何故か得たもの寂しさと、まだ網膜に焼き付いているあの笑顔と、……思い出す度に乱れる胸の鼓動に、今になって気がついた。

ついさっき会ったばかりの相手に、どうして必死になって伝えようとしていたのか。

なんてことはない。余裕がなく思い至れなかっただけで、思えば答えは酷く単純なモノだった。

……一目惚れ、だったんだろう。

だから生きてほしいだなんて、なかなか僕も自分勝手に傲慢な人間らしい。

いきなり一人になった寂しさと居たたまれなさに急かされて、すっかり冷めたオムカツを素早く平らげ店を出た。

3

外に出た瞬間に耳へとなだれ込んでくる雑多な音。

この時の、雰囲気というか空気というか……世界が切り替わるような感覚は誰しも味わったことがあると思う。

今まで店内での用事や商品のことで頭を巡らしていた脳味噌にノイズが混じり、集中を乱されてはたと気づく———というあの経験だ。

僕にとっての考え事は、彼女とのよく分からない出会いと不思議体験だった。

自分の偽善的な行動に苦々しさを感じながらも、どこか心地の良さにも満たされるという経験。

けれどそれは、そんな気分は、店から出てわずか数mのところで

吹き飛ばされることになった。

雑音を今まで遮っていたドアを開けた時のように、僕の思考に没頭していた頭は現実へと引きずり出されて、目の前に映し出されたのはさつきとは違った冷たさのある世界。

人混みの中、道の両方向からやってくる人の流れを無視して、コロロさんとカラリさんが佇んでいた。

前回同様の制服ではなく、それぞれ私服で、コロロさんは黒を基調にした装いに丈の短いチェックスカート、カラリさんは桜模様のワンピースと随分可愛い。

先日チェンソーや火薬を振り回していた人物には思えないほどだ。

が、中身はアレな感じな人達であることは身に染みて理解している。

一刻も早く逃げないとヤバイ。彼女達は今更人目なんて気にしないはずだ。

即座にそう判断し、踵を返そうとしたところで、

「いいの？」

挑発的でも攻撃的でもなく、ただただ問いかけとしての意味しかない、淡々とした抑揚で発せられた声に、足裏を地面から浮かせるタイミングを逸してしまった。

声の主はカラリさんで、その顔には作者に向けたような皮肉や嘲りではない、真剣さすらある表情が見て取れる。

「いや、まあ俺らが気にすることでもねえんだけどさ……」カラリさんはポリポリと頬を掻いて再度言った。「いいのかなって」

その問いが何を示唆してのことなのか僕には分からず、けれど猫を被っていた時とも、作者をいたぶっていた時とも違った彼女らの雰囲気しに重大性だけは見出して、おそろおそろ尋ねた。

「……………何の、話ですか？」

「あの娘の話、もうすぐ死んじゃうけどいいのかってコト」

僕の問いに答えてくれたのは先ほどから僕に目線も向けないコロ

口さんだった。

「…………え？」

意味が分からずに思わずそう訊き返した僕に、

「だから……あの娘は死ぬんだって」

彼女は言い聞かせるように言っ、それからあの名前も知らない相席相手の消えていった方角を見る。『あの娘』というのが、ついさっき僕が邂逅していた彼女を指しているのは間違いない。

つまり、あの彼女が死ぬと、この二人は言っている……？

いやしかし、待つてほしい。

それはあり得ない。彼女には顔があつたじゃないか。

その事実と共に、今日の前にいる彼女達が一応自分と敵対していることを思いだし、僕は一つの結論を得た。

この二人は作者を孤立させたいがために、仲間割れを狙っているのではないか？

さきほどの言葉は精神的揺さぶりをかけるためではないか？

けれど、彼女が脇役ではないことを僕は知っている。

その手は食わない。退避できるように足を引いて、退路を探す時間稼ぎに口を開いた。

「先輩方が何を根拠にそんな話をするのかは知りませんが、僕はそれはないと思います」

「へえ、何故だ？」とカラリさん。

「彼女には顔がありましたから」

「顔？」

疑問を口にするコロロさんと首を傾げるカラリさんの様子に、アドバンテージを確信した僕は幾分か強気になって言った。

「あのクソつたれの作者がくれた眼のおかげで、僕はのっぺらぼうかどうかで、主要人物と脇役を見分けられるんです。彼女には顔があった。主要人物である彼女は死なない」

そう、作者はライトノベル作家志望だし、彼女は女の子だ。ヒロインなど易々と殺せるものではない。彼女達は作者の準ヒロインが

四人であるという発言も知らないから、彼女が容姿的に優れているのを見て、この物語の登場人物だと踏んだのだろうが、そもそも作者は物語開始前にヒロインが殺されるからとやってきたのだ。例えば彼女がこの物語の役者だったとしても、今は時系列的には物語が始まる一前（、）であり、主要人物が死ぬことはありえない。

あの彼女が別の物語のヒロインであることから考えてみても、二人が彼女について知っているはずもない。

「そう簡単に騙されません」

けれど、決定的証拠を突きつけた探偵のように勝ちほこり、犯人の告白を期待していた僕の思惑と違い、

「へえ……そりゃあ随分と便利そうな眼を貰ったもんだな」

カラリさんは狼狽する素振りをわずかほどにも見せず、コロロさんに至っては哀れなモノを見る目で僕を見つめている。

その反応に僕の方が焦りを覚えて、それが口に出る前にカラリさんが喋り始めた。

「君が言うとおり彼女は脇役じゃない。作者に個性を付加されたキャラクターだ。けれど、ヒロインでもない」

「いや、でもっ」

「確かにラノベにおいて女性、それも主人公……ああ読者に置き換えてもいいが、それらに歳が近い中学生から高校生ぐらいまでの女キャラクターは死にくい。基本的に主人公と恋愛するか、主要男性キャラとくっつく可能性が高いし、ヒロイン死亡っていうショッキングな展開はラノベでは受けがよいものとは言い難いだろうからな。でも、彼女は違う」

カラリさんはバッグから一冊のノートを取り出して僕に差し出した。

それは見覚えのある表紙をしたB5サイズのノートで、表紙には汚い字でタイトルが書き殴られていた。

教室に置き去りになったはずの、作者のプロット帳。

彼女達が拾って、それが今——僕の手にある。

「この中には物語の全貌が書かれているはずで、それはつまり彼女の言ったことは……っ。」

乱暴にページをめくる僕に、カラリさんは台詞の続きを語り始めた。

「物語においてキャラクターは登場人物とそれ以外の脇役に分けられる。登場人物には性格と容姿、行動背景が与えられるが、脇役は個を特定させる必要がないため、君が言うように『顔がない』」

ページの右端に『登場人物』と銘打たれた箇所を開く。

ほとんど情報の書かれていない主人公のページ。

こと細かに設定が記された真正ヒロインである実歩さんのページ。名前と性格は違うものの、電波娘と澁刺娘のキャラ設定が書かれたページ。

他にも、亡くなった二人の準ヒロインのページも見つかった。

なのに、あの無表情な彼女のページが見当たらない。

彼女がこの物語のキャラクターだというのなら、載っていないければいけないのに。

一体どこに、僕の手は半ばページを破りかねない勢いでページをめくっていく。『世界観』『用語集』『フローチャート』……。

「けれど、主要人物と言えないまでも、個であることを要求されるキャラクターというのも存在するんだ。脇役と言うには物語内で語られる頻度が高く、主要人物と言うには出番がすぐ終わってしまう、そんな例外的存在」

キャラクターに言及していそうなページを探しても彼女らしき記載はない。

もう一度初めからめぐり始めた手はやっと……やっとそれらしき文章を捉えて停止した。

「それ故に、特定できるだけの外見と安直な人格が与えられ、時には薄っぺらい背景も付け足されるが、その設定は慰み程度の代物でしかなく、……その本質は結局のところ舞台装置としての脇役だ。物語の演出装置、消費されるためだけに用意された仮初めの登場人

物」

『能力一覧』と書かれた、超能力を書き並べたページの一番上、【鯢】と僕の能力について書かれた箇所に『無表情娘』と名前すら考えられていない彼女の表記。そこには……………」

「……………」彼女は使い捨てキャラだよ」

そこには、『無表情娘による自爆テロで覚醒』と素っ気ない文字が踊っていて、その脇の空白に彼女の容姿や行動理由が申し訳程度にメモされていた。

『捨て子。能力者でありながら、能力者の敵対組織に拾われ、能力者殺しとして育てられる』

……「確信犯的な行動だったのでしょうか？」と彼女は訊いた。

親の言葉を鵜呑みにする無垢な子供のように、属する組織の教えを、おそらく能力者殺しを肯定する教えを信じてきた彼女は、ある時思ったのだろう。自分のしてきたことは本当に正しいのかと。

揺らぎ始めた信念を抱えて彼女は今日も任務に就く。

答えを導き出せぬまま、出会って間もないガキに問いかけ、そしてそのガキは……………」僕は言った。

「あんなことをする奴に思想だとか信念だとか、そんな上等なモノは存在してない」と。

「良心は痛まないのでしょうか？」と彼女は重ねて訊いた。

それに「爆発なんて手段を取ろうとする人間に良心なんてない」と僕は答えた。

『彼女の能力は「蟬」。爆弾使いとペアを組み、爆弾殺人を繰り返す最中、標的として主人公に出会う』

「小林さんは取り返しをつかないこと、やってしまったことってありますかっ!？」と彼女は切実に問いかけてきた。

標的は——僕。僕だった？

彼女の生きる世界は僕の物語だった？

「爆弾殺人による臨死体験で能力に目覚める」と作者は言った。

けれど、それが物語の開始前なのか後なのか思えば彼女は口にしていない。勝手に主人公の覚醒は物語の最中だと思い込んでいた。

けれど……違う？

力が抜け、指の拘束を解かれたノートのページがパラパラとめくられていく。読み促すように開かれた『あらすじ』と題打たれた左ページに、もっと決定的な文章を見つけた。

『ある日、主人公は行きつけの定食屋で一人の少女と出会う』

「ある日」とは何時なのか。その答えを知っている作者は僕に今日の日付を訪ねてきた。

『彼女と少しの間言葉を交わした彼だったが、突然爆発に襲われる』

標的。

『それは少女が用意したもので、自爆テロだった』

爆弾殺人。そして、

『一命を取り留めた彼は臨死体験と共に自分に特殊な能力があることを知る』

能力の覚醒。

『一目惚れだった少女の喪失に傷を負い、少女に自爆テロをさせた犯人をさせた犯人を探す主人公』

……これが僕の背景、物語における行動、原理。

『そんな生活を続ける中で、ヒロインと出会い物語は始まる』

舞台装置、物語の演出装置、消費されるためだけに用意された仮初の登場人物。

僕の過去を演出するためだけに用意された使い捨てキャラ。

「あの娘がもうすぐ死ぬ」とさっきコロロさんは言った。

悩んで悩んでその結論として、彼女は自殺を選ぶ。

それが自爆テロの真相で、作者の演出。

「生きてていいんでしょうか？」

その問いに、

「繰り返さないってことが大切」

と僕は、今まさに僕を殺そうとしている彼女に言ってしまった。

それはきつと、『取り返しのつかない』一言だったに違いない。

彼女は、

「……………ありがとう」

そう微笑んだ彼女は、唯一の荷物だったボストンバッグを持って

――！

ノートを捨てて、駆け出す。

彼女の向かったのは……繁華街から離れた方角。向こうには確か、人気の少ない公園があったはず！

彼女の消えた建物を曲がり、その先200mほど商店街を通過して今度は左、信号を渡った先にある遊具もない公園。

あそこなら人を巻き込む可能性は低い。彼女が行くならあそこだ！きた道を逆走し、定食屋を通り過ぎて彼女を見送った建物の角を右折。

けれど、そこから200mを直進する前に、足が止まった。

「あんた……」

行く手を阻むように、作者が道の真ん中に立っていたからだ。

「何で」という言葉を飲み込んで、僕は目を細めて自分を見つめる彼女を睨む。

なんてことはない。最初から観察してやがったのだ、この野郎は！僕と彼女を会わせるために細工して、予定通りいくかを観察して。そして今、狂い始めた計画を修正するべく、こうして僕の前に立っている。

「行くな」と言葉に出さずとも、無言で威圧を与えてくる作者を僕は無視して走り出した。

彼女の横を過ぎようとする最中、

「役立たず」

と、ゾツとするほど低い声で吐きかけられが、もう足は止めない。数メートル行ってからちらりと後ろを確認すると、作者は追いかけてくることもなく、振り向きもせずにさっきの場所に佇んだままだった。

追ってこないならそれでいい。

視線を戻し、足を加速させる。

玩具屋を、呉服店を、百貨を、視界の左右へと流し、商店街を抜けて左。

信号は赤、けれど構うものか。

ここにきて、僕は初めて自分から罪を犯した。

ちようにど走ってきた車両がブレーキ音を響かせるのを聞きながら、クラクションを鳴らされても無視をして、6車線の道路を横断していく。

そう広くはない公園だ。見渡してすぐに彼女の姿を見つけた。

短めの藍色の髪、走ってきたことで赤く色づいている色素の薄い肌色、同じ年頃の名もない少女。

使い捨てのために作者が考え出した、登場人物。

まだ僕の存在に気づいていない彼女に走り寄って、僕は彼女の抱えるポストンバッグを掠め取った。

「————え？」

振り向いた彼女の顔に浮かび上がるのは驚愕。

信じられないモノを見るような表情の彼女を尻目に、彼女から距離を取るため走り出す。

後ろから、何やら叫ぶ声が聞こえた、その次の瞬間。

ボストンバッグは爆発した。

第四話 一使い捨てキャラの悲劇（後書き）

色々直さないとなーと思う部分があるのですが、書き終えてから全体を見てととのえようかなと思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013v/>

だから僕は作者を殺す

2011年11月16日03時24分発行